

一人芝居  
天の  
魚  
いお



2009年

東京大学駒場キャンパス公演  
(石牟礼道子『苦海浄土』より)

2009年5月13日(水)~15日(金) 於 駒場小空間

企画書

2009年5月1日版

# 目次

目次		2
趣意書		3~4
企画概要		5
賛同人		6
資料編		
「天の魚」とは		8
一人芝居「天の魚」2006年復活公演趣意書		8~9
「天の魚」再演のご案内（2008年船堀公演に関して）		9
これまでの足あと		10
紹介文・劇評など		
① 星埜守之、「本願の会」会誌『魂うつれ』2007年掲載記事		11
② 最首悟、「あねさん、あねさん」『未来』2007年9月号（未来社）掲載		12~13
③ 佐藤健太、「十四年ぶりの公演に向けて石牟礼道子原作・砂田明脚色 ひとり芝居『天の魚』」「『ノーマライゼーション』2007年7月号掲載		14~16
④ 丹波博紀、「一人芝居『天の魚』の希望」『季刊・水俣支援』2007年掲載		16~17
⑤ 最首悟、「霧が光る——ひとり芝居「天の魚」によせて」 最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007		17~19
⑥ 川島宏知、「妣たちにつながる根——聞き書き・川島宏知」 最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007		19~24
⑦ 星埜守之、「砂田明という役者がいた」 最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007		24~31
メディア掲載		
朝日新聞西部夕刊	2006年9月12日	32
朝日新聞朝刊	2006年9月16日	33
日刊ベリタ	2006年9月17日	34~35
J A N J A N N E W S	2006年9月20日	35~36
毎日新聞夕刊	2006年9月21日	37
毎日新聞朝刊	2007年9月6日	38
週刊金曜日	2006年10月13日（確認中）	38
朝日新聞朝刊	2007年9月7日	39
朝日新聞朝刊（別の記事）	2007年9月7日	39
東京新聞夕刊	2007年9月15日	40
朝日新聞朝刊	2007年9月18日	41
A E R A	2007年11月3日	41
週刊金曜日	2007年9月14日	42
朝日新聞	2008年8月14日	43
新潟新聞	2008年8月14日	44
毎日新聞	2008年8月15日	44
新潟日報	2008年8月21日	45
新潟日報	2008年9月7日	45
週刊金曜日	2008年10月31日（確認中）	46
朝日新聞朝刊	2008年11月12日	46

# ひとり芝居「天の魚」(原作石牟礼道子『苦海浄土』)

2009年東京大学駒場キャンパス公演

## 趣意書

2009年1月20日

2009年は石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』が刊行されて40年目にあたる。

『苦海浄土』は、石牟礼道子が初期の水俣病患者さんとその状況取材して回って記した作品である。『苦海浄土』の初稿は、『サークル村』などに1960年以来掲載された『海と空のあいだに』であり、それならば確かに40年目を殊更に強調する必要はないのかもしれない。

とは言え、1969年の『苦海浄土』刊行がどれほど多くの人の思いを水俣に向け、さらには全国各地のその後の公害闘争に影響を与えたのか、また日本における環境倫理、生命倫理への問いかけの一つの出発点となったのか、そのことを今更改めていう必要はないと思う。そしてだからこそ、わたしたちは、水俣病と『苦海浄土』、そしてそれらをめぐり現在までつづくこと、語られてきたことについて、40年目のこの機会に何ほどか考えてみる必要があると考えている。

たとえばその作業を宇井純が発したひとつの原理からはじめてみるのもよいかもしれない。かれは水俣病を追う中で見えてきたことのひとつとして「公害には第三者はないこと」を挙げた。かれはこれにつづいて、わたしたち誰もが潜在的に公害の当事者であり、第三者を名乗るものは必ずといってよいほど加害者の代弁をしてきたと述べた。この原理が述べられたのは1968年のことである。

一方、この原理は40年後の現在どう映るのか。

現在、「公害問題」ではなく「環境問題」が日々取り上げられている。そのもとでは、たとえば地球温暖化にしろ、多重化学物質汚染にしろ、わたしたちが「第三者(で)はない」ことは自明として扱われる。その理由のひとつとして政策論的にも企業のマーケティング的にもそれが妥当性をもちうることを挙げてよいのではないか。

一方で、それに比例して、わたしたち個々の「被害」「加害」「第三者」をめぐる錯綜したありよう——たとえば、わたしたちは「第三者(で)はない」といわれており、確かにそれはわかるが、第三者気分が抜けず、しかも被害者でありそうで、加害者としての居心地悪さもありそうだ、その上で「水俣」(にかかわらないが)気になってしまうありよう——は以前と変わらずヴェールで覆われており、さらに悪いことにかえて問いづらい状況になっているように思える。

たとえば学問研究の場に限定してみると、そもそもこうした錯綜を保持しようとする自体が、対象に対する客観性の欠如と見なされてきた。そうであればこそ、現在の「環境問題」の時代において取られる態度は次のとおりである。すなわち、まず錯綜自体をカッコでくくり、しかも研究の必要性の根拠として「第三者はないこと」を取り上げ、そのうえでみずからは「第三者である」という立場にいようとする。つまり現在、宇井純の「第三者はない」は、「第三者」的態度で(しばしば上から目線で政策論的に)「環境問題」を研究するための格好の口実となるわけだ。

しかし実際には、この錯綜は「(学問や研究)入門前」までに一時的に抱き、「入門後」はすっかり

割り切って忘れてよいようなものではないはずだ。そして、こうした錯綜こそ、みずからがみずからにつねに問うていく、わたしたちの行動のみなもとであるはずなのだ。石牟礼道子や宇井純の作品がわたしたちに投げかけてきたことは、わたしたちがみずからの錯綜を問うということに他ならなかったはずだ。だからこそ、わたしたちは歩き回り思考するなかで、みずからの錯綜を問いつづけ、その果てにあるみずからの生き方や社会のあり方への希望に思いを馳せたいと思うのだ。

わたしたちはこうした錯綜の中での問いをひとり芝居「天の魚」を通じておこないたいと考えている。具体的には、東京大学駒場キャンパスの駒場寮跡地にある駒場小空間において、2009年5月13日(水)から15日(金)まで、『苦海浄土』を原作とするひとり芝居「天の魚」を公演したいと思う。

ひとり芝居「天の魚」は、俳優の故・砂田明が『苦海浄土』第四章「天の魚」を演劇化したものである。

かれは『苦海浄土』に「自らの内部に忽然と未知の世界が展げてくるような戦慄を、あるいは古くて遠い記憶の底の部分呼び醒まされるような感動」を味わい、特に「ゆき女聞き書」と「天の魚」からは「劇的なカタルシス(=美的蘇生感)」をおぼえたのだという。そのため、かれは「ゆき女」と「天の魚」を通じて観客に「カタルシス」を与えることを決意したのだった。端的には、役者であるかれみずからが舞台上で呪術師となることで、水俣病患者たちのよみがえりと鎮魂の儀をとりおこなおうとした。それはいわば「よみがえりの共同性」の呼び起こし、またはユートピアへの思い潜めであったかもしれない。

かれは「天の魚」の一番のぞましい効果として、「観た人が水俣のために何かをするというのではなく、劇が自分を見つめ直す“鏡”になって、自分の中の多様な可能性を自分で発見し、今の生き方を自ら変えてゆく」ことの契機となることを挙げている。わたしたちが「天の魚」を駒場小空間で公演しようとした背景には、以上のような砂田明の思いへの共感があることはいままでもない。

「天の魚」は、1980年1月の水俣市湯堂、出月での公演を皮切りに全国各地で巡演され、かれが死去する前年の1992年までにのべ556回公演された。初公演の翌年1981年、かれは紀伊国屋演劇賞特別賞を受賞している。東京大学での公演について述べれば、1980年12月に文学部学生ホールで公演され、また1986年には7号館にてワークショップのかたちで公演された。その意味で今回の「天の魚」は20年ぶりの駒場キャンパス公演であるということもできる。

さて、砂田が死去した後、長らく「天の魚」の演じ手はいなかった。

だが、2006年の「水俣・和光大学展」において砂田の弟子である俳優・川島宏知が復活公演を決意し、それから本年までのあいだ新潟水俣病の発生地である阿賀野市を初めとして全国各地で公演の回数を重ねてきた。わたしたちは今回この川島宏知による「天の魚」を駒場小空間で公演したいと考えている。そして「天の魚」とその原作である『苦海浄土』から公害の原点である水俣病を学び、さらに現在わたしたちが営む生活や社会のあり方に眼差しを向け、わたしたちの希望のありかについて問うていきたいと思う。

今回の公演は大学構内の空間を利用する。しかし、わたしたちはこの空間を学生のみならず誰に対しても開放された場所にしたい。そのため、各所で公演のアピールをおこない、協力や加勢をお願いしていく。また、三回の公演に併せて、『苦海浄土』や「水俣」に触発され、考え発してきた人々によるゲスト対談をおこない、すべての参加者が活発に議論できる場所を生み出したいと思う。

## 記

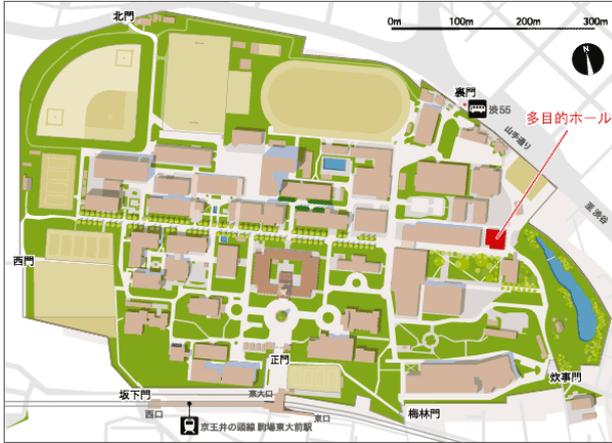
期間 2009年5月13日(水)、14(木)、15日(金)

時間 18:00~20:30

会場 東京大学駒場キャンパス(駒場小空間)

# 企画概要

- 企画名 ひとり芝居「天の魚」2009年東京大学駒場キャンパス公演
- 日程 2009年5月13日(水)、14日(木)、15日(金)
- 会場 東京大学駒場キャンパス内 多目的ホール(駒場小空間) \*駒場寮跡地に該当する



- 公演時間  
開場： 17時30分  
「天の魚」上演： 18時～19時20分、  
ゲスト・アフター・トーク： 19時30分～20時30分  
\*整理券を16時45分から配布
- 入場料および入場者 無料(カンパ、寄付、協賛により運営)、東京大学学生および地域住民
- 席数 200席(予定)+立見 \*バリアフリー
- ゲスト対談者  
13日(水)  
加藤登紀子(歌手)×最首悟(元東京大学教養学部助手)  
テーマ 『苦海浄土』と東京大学——ふたつの“1969”  
\*加藤登紀子さんの歌あり  
14日(木)  
立岩真也(社会学者)×鬼頭秀一(環境倫理学/科学技術社会論)  
テーマ “1969”から考え継ぐ  
15日(金)  
今福龍太(文化人類学者)×星埜守之(仏文学者)  
テーマ 石牟礼道子文学と群島・世界論

- ひとり芝居「天の魚」  
【原作】 石牟礼道子『天の魚』  
【脚色】 砂田 明  
【潤色】 川島宏知  
【演出】 岡村春彦
- キャスト  
【出演】 川島宏知  
【効果】 あねさんの声役/ 砂田エミ子(砂田氏のお連れ合い) 琵琶/ 田原順子 笛/ 設楽瞬山
- スタッフ  
【舞台監督】 小野瀬弥彦/ 柚谷昌洋 【照明】 小澤明彦 【音響】 井出比呂之  
【製作】 東京不知火座
- 運営事務局  
【企画・運営】 「不知火グループ」  
【代表】 最首悟、星埜守之  
【事務局】 「最首塾」(<http://www.geocities.jp/saishjuku/>)内  
【世話人】 丹波博紀、白石忠男  
【ホームページ】 [http://www.geocities.jp/saishjuku/tennoio\\_2009/tennoio.html](http://www.geocities.jp/saishjuku/tennoio_2009/tennoio.html)  
【問い合わせ電話番号】 090-9971-6642  
【メールアドレス】 [saishjuku@yahoo.co.jp](mailto:saishjuku@yahoo.co.jp)
- 協賛
  - ・マザーズグループ  
(夢市場株式会社、株式会社にんじん、マザーズブランド、株式会社はまなす、マザーズマクロビオス)
  - ・有限会社けるぷ農場
  - ・D.K.Zeit Co.Ltd

# ひとり芝居「天の魚」 賛同人

2009年4月27日現在

(敬称略・50音順。以下は特に本公演への賛同人も含む。「天の魚」自体への賛同人には\*を記す)。

阿木 幸男	(河合塾コスモ講師)	
石黒 聡	(学生)	
石牟礼 道子	(作家・原作者)	*
稲垣 聖子	(大学院生)	
今関 惇	(「悶問」世話人)	
今福 龍太	(文化人類学者)	
梅原 宏司	(大学院生)	
大川 正彦	(政治学・東京外国語大学)	
緒方 正人	(漁師)	*
おした ようこ		
甲斐 扶佐義	(写真家・ほんやら洞／八文字屋)	
金森 修	(科学思想史・東京大学)	
金子 淳人	(哲学・大学講師)	
鎌田 行平	(社団法人千葉県人権啓発センター常務理事)	
川崎 那恵	(大阪市立大学卒業生)	
川浪 寿見子	(くらし工房)	
川本 隆史	(倫理学・東京大学)	
鬼頭 秀一	(環境倫理学／科学技術社会論・東京大学)	
金 永洙	(神父・神の愛の宣教師団)	
久保田 好生	(東京・水俣病を告発する会)	
栗原 彬	(政治社会学・立教大学名誉教授)	
暮尾 淳	(詩人)	
黒住 真	(倫理思想・教員)	
小松 美彦	(科学史／生命倫理学・東京海洋大学)	
最首 悟	(環境哲学・元東京大学助手)	*
坂西 卓郎	(水俣病センター相思社)	
佐藤 静	(大学院生)	
沢下 元	(自営業)	
白石 忠男	(自営業)	
白山 映子	(大学院生)	
砂田 エミ子	(砂田氏遺族・脚本著作権者)	*
高石 伸人	(ちくほう共学舎「虫の家」)	
高草 木 光一	(社会思想史・慶應義塾大学)	
竹村 洋介	(社会学・大学教員)	
田嶋 いづみ	(「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク)	
玉木 明	(ジャーナリスト)	
丹波 博紀	(大学院生)	
土本 典昭	(映画監督＝故人)	*
堂前 雅史	(科学技術社会論・和光大学)	
時枝 俊江	(映画監督)	*
外村 大	(日本近現代史・東京大学)	
中田 千絵	(和光大学卒業生)	
中野 浩	(大学院生)	
新居 草太	(学生)	
西岡 理智子	(和光大学卒業生)	
旗野 秀人	(新潟・冥土のみやげ企画)	*
花崎 皋平	(哲学者)	
原田 正純	(医師・熊本学園大学)	*
廣野 喜幸	(科学史／科学論・東京大学)	
福永 真弓	(環境社会学／環境倫理学・立教大学)	
藤本 寿子	(前水俣市議会議員、現ガイヤみなまた職員)	
保坂 のぶと	(衆議院議員)	
星 守之	(フランス文学・東京大学)	
前田 保	(滝沢克己協会・大学講師)	
丸山 真人	(環境社会科学・東京大学)	
米沢 慧	(批評家・岡村昭彦の会世話人)	
渡辺 京二	(評論家)	*
渡辺 容子	(杉並の不当な教科書採択取り消し裁判の会)	

# 資料編



# 「天の魚」とは

石牟礼道子「苦海浄土」の中の一章、「天の魚」をもとに、故・砂田明が脚色・構成した演劇作品で、胎児性水俣病の孫を持つ年老いた漁師の語りで構成されています。砂田による公演は1979年水俣から始まり、1980年2月東京・浅草木馬亭公演、その後全国各地を巡演し、1992年、砂田が病に倒れるまで、上演556回を数えました。この間、1981年に紀伊国屋演劇賞特別賞を受賞しています。

1993年に砂田が死去した後、長く上演されることがありませんでしたが、砂田の弟子でもある俳優・川島宏知によって、2007年9月、14年ぶりに復活上演されました。

復活上演にあたって、2006年、かつて砂田の東京公演を支えた「東京不知火座」を再度立ちあげ、制作にあたることになりました。

## 一人芝居「天の魚」2006年復活公演 趣意書

砂田明という演劇家のことをご存知でしょうか。

1970年。戦後高度経済成長の頂点とも言えるこの頃、日本は消費社会を謳歌し、大阪の万国博覧会には全国から訪れた人々が溢れていました。「豊かな社会」の到来や「人類の進歩と調和」という楽天的なスローガンが叫ばれていたそんな一時期に、それらのスローガンの陰で垂れ流されてきた毒に苦しむ幾多の人々の、いのちのための長い闘いもまた、大きなうねりとなって私たちを震撼させていたことを、みなさんは思い出すでしょうか。

この年、東京の舞台人として活動していた砂田明さんは、石牟礼道子さんの『苦海浄土』に導かれるように、無数の被害者を出した水俣病の爆心地へと向けて、巡礼の旅に出立します。そして、やがて水俣の地に居を定め、こんどは『苦海浄土』の一章を演劇化したひとり芝居「天の魚（てんのいを）」を演じながら、十数年にわたって全国を行脚することになるのです。それは、水俣の美しい海と山の光景、しかしまた、水面の下で水銀に冒された光景の悲しみを、病に倒れた人々の深い痛みと刺すような問いかけを、魚たち、動物たち、草木たちの霊を、それに、すべての生命が共生する世界への想いを、身体ひとつに宿しながら、あらゆる人々の魂を揺さぶりつづける舞台であり、闘いの旅でした。

砂田明さんが旅半ばにして65年の生涯を閉じてから今年ではや13年。水俣病の「公式発見」からはすでに半世紀の歳月が経過しようとしています。けれども、水俣病はまだ終わってはいません。患者の皆さんの苦闘がいまなお続いているのと同時に、水俣を考え続けることの普遍性、重要性がますます感じられてきているとさえ言えるのではないのでしょうか。そんななか、私たちは砂田さんの志を継いで、あらたな「天の魚」を舞台に上せようという思いを手放さずに今日まで過ごしてきました。

そしてこの度、砂田さんに演劇の教えを受け、また、砂田さんの芝居を陰で支え見守ってきた俳優の川島宏知（小松敏宏）から、この舞台をふたたび演じたいという申し出を得ることができました。これを受けて私たちは、川島宏知によるひとり芝居「天の魚」復活プロジェクトをスタートさせま

す。初演は本年9月15～24日、和光大学で催される水俣・和光大学展にて、本公演は来年秋ごろを予定しています。

つきましては、皆様がたのご支援、ご協力のほどを心からお願いする次第です。

2006年6月 東京不知火座/代表・岡村春彦（文責：星埜守之）

## 「天の魚」再演のご案内

（2008年船堀公演に関して）

なにしろ続けることだけが、私たちに出来る唯一の表現なのです。

今年も、懲りずに公演を続けることになりました。昨年とは、少し趣向が変わります。

昨年の反省を踏まえて演出家を迎え、主役の川島は、演技に専念することになりました。その演出家・遠藤邦夫は、不知火座の代表である岡村春彦に川島とともに演劇の指導を受けた演劇仲間で、昨年の公演の際、船堀に奥様と共に駆けつけて全面的な協力を惜しまなかった人です。演出は当然ですが、美術も照明・音響も変わる。また、この一年の精進の成果を川島の演技が見せると思います。どうぞお楽しみにしてご来場下さい。

もう一つ、若い人たちにとって、すでに古典の世界に入っている「苦海浄土」の世界を、現在社会に再度開こうと思いました。水俣世界から発信し続ける原作者の石牟礼道子さんについての講演を、各公演の前につけました。講演者は、不知火座後援会の代表である最首悟氏で、4回の連続で依頼しました。一回ごとにテーマが違いますので、半券を捨てずにお持ちいただければ、一枚のチケットで講演だけは入場できるようにいたします。

食の安全だ・エコ社会の実現だと、騒がしい世の中になってきました。言われていることは、確かにやらないよりやったほうが、良いことなのでしょう。しかし、私が水俣に関わった70年ごろ、水俣の動きは、「負け戦」「吊い合戦」なのだとと言われておりました。水俣の被害が、回復出来ない・償えないものならば、社会のシステムを継ぎ足すのではなく、人そのものが変わらなければなりません。今に至るまで変われなかった私が書くのも、不遜を通り越して恥ずかしいことですが、そんな私でも希望を見ることは出来ます。この芝居の主人公「江津野老」の矜持が、羨ましくそして救いに思えます。この老人を支える環境と生きる姿勢は、「いのち」という説明不能の言葉を体現しているのではないのでしょうか。この舞台を維持することは、社会に希望の火を灯すことだと自負しております。

東京とはいえ外れの江戸川・船堀の公演でご不便をお掛けするかもしれませんが、どうぞご来場くださいませ。お待ちしております。また、この演劇は、お呼び下されば、何処へでも参りますので、お声をお掛け下さい。

（文責・宮本成美/2008年9月）

# これまでの足あと

2006年5月

川島宏知、『天の魚』の復活を決意。東京不知火座を再度立ちあげる。9月開催の「水俣・和光大学展」での予備公演を決定。

同年6月

趣意書完成。岡村春彦氏に東京不知火座代表を依頼。

川島とスタッフ1名、水俣・熊本に出向き、砂田エミ子さん、石牟礼道子さん、渡辺京二さんに面会。激励を受け、賛同人の了承をいただく。

スタッフ数名が和光大学で行われた化学史学会シンポジウムに参加、シンポジストとして参加された原田正純さんに面会、賛同人の了承をいただく。

土本典昭さん(故人)、最首悟さん、時枝俊江さん、旗野秀人さん、緒方正人さんに連絡、賛同人の了承をいただく。

同年7月

水俣・和光大学展での上演スケジュール決定。和光大学にて打ち合わせ等進行。

同年8月

時枝俊江さん(映画監督)を訪問、助言をいただく。

朝日新聞(西部本社)の取材を受ける。

同年9月

2007年本公演の場所と日程が決定。岡村春彦さん宅で通し稽古。演出の助言をいただく。

朝日新聞西部本社版(9/12付夕刊)・東京版(9/16付)に記事が掲載される。

水俣・和光大学展(9/15～24)。毎日新聞の取材を受ける。

日刊ベリタ、JANJANに掲載。毎日新聞(9/21付夕刊)に掲載。

同年10月

週刊金曜日(10月13日号)に劇評掲載。最首悟さん(和光大学教授=当時)に東京不知火座後援会長を依頼。

2007年4月

川島とスタッフ4名で水俣へ。5月1日、乙女塚での慰霊祭。慰霊祭後の茶話会で、『天の魚』の冒頭部分を見ていただく。2日、水俣周辺何ヶ所かにご挨拶。茂道の杉本栄子さん・雄さんご夫妻、ほっとはうす、女島の緒方正人さん、水俣病センター相思社、浮遊雲工房の金刺潤平さん。3日、熊本に移動、原田正純さんのお宅をお訪ねする。石牟礼道子さんのお宅をお訪ねした後、帰京。

同年9月

毎日新聞・東京新聞・朝日新聞「ひと」に掲載される。

タワーホール船堀にて本公演。読売新聞・熊本日日新聞・アエラの取材を受ける。

同年10月

「アエラ」(11月5日号)に記事が掲載される

2008年1月

東京不知火座総会。新潟公演の実現を目指すことと、11月東京での再演を決定。 20

5月 新潟県阿賀野市で行われた追悼集会に、川島とスタッフで参加。旗野秀人氏(冥土のみやげ企画)と新潟公演の打ち合わせ。

新潟公演は9月7日、新潟市民芸術文化会館「りゅーとぴあ」能楽堂に決定。

同年8月

朝日新聞(14日)、新潟日報(14日、21日)、毎日新聞(15日)に新潟公演について記事掲載。

同年9月

新潟公演(6日阿賀野市・7日新潟市)。主催、新潟水俣病安田患者の会、新潟県、新潟市。後援、阿賀野市。新潟日報に記事掲載(7日)

同年11月

1日(土)、2日(日)、3日(祝)、東京江戸川区船堀「タワーホール船堀」にて4回公演。公演に併せて最首悟さん(元東京大学助手、和光大学名誉教授)による特別講演「石牟礼道子の世界」がおこなわれる。

29日に上越市土橋の市民センターにて二回公演。

2009年5月

東京大学駒場キャンパス内の駒場小空間(駒場寮跡地)にて三回公演予定。併せてゲストによる対談をおこなう。

# 紹介文・劇評など

## ①「本願の会」会誌『魂うつれ』2007年掲載記事

星埜守之

砂田明さんの一人芝居、「天の魚」をご覧になったことがあるでしょうか。暗い舞台の闇からふつと浮かび上がるように現れる仮面と黒衣の老人が、胎児性水俣病の孫のことを、病に冒されていった家族の来歴を、不知火の海を、ときにやさしく、ときに切々と、そしてときに怒りにかられながら語ってゆくこの芝居を携えて全国を巡った砂田さんが亡くなってから、ことしでもう十四年になるうとしています。石牟礼道子さんの『苦海浄土』の一章を演劇化した台本も、その後だれが演じることもなく、年月の流れに洗われるままになっていました。

たしかに、東京から水俣病を告発する巡礼の旅にでるところから始まり、湯堂、そしてやがて神川に居を定めて患者の方々の傍らに身をおき、「みなまただいすき」の言葉を残して逝った砂田さんの生き方と一体になっていたとも言えるこの舞台を、再び演じることは、なまかな勇氣や覚悟でできるような事柄ではないでしょう。砂田さん自身にしても、この芝居を水俣と全国各地との往還のなかで鍛えていくのにどれだけの命を注ぎ込んだことでしょうか。私は若い頃に砂田さんの旅に幾度か同行させていただきましたが、そのなかで、たとえばこの芝居の興行を水俣で打った折の恐ろしい緊張感が思い起こされます。それでも、石牟礼道子さん、田上義春さんをはじめとする多くの方々の支えがあってこそ、そして、水俣病の受苦の深さそのものに促されるようにして、「天の魚」は旅を続けたのだと思います。それを考えると、これは砂田さんの一世一代の、つまり、一代かぎりの命の道行きであったのだと言いたい気持ちにもなります。

ですから、このたび川島宏知がこの芝居を同じ台本で演じることを決意したと聞いたときには、期待とともに大きな不安を抱かざるをえませんでした。もちろん、もし仮にこの芝居が再び舞台上せられるのであれば、それを演じることになるのは、砂田さんの教えを受けた演劇人であり、1971年の「劇・苦海浄土」の水俣行きにも加わり、その後も「天の魚」を陰で見守り、助力を惜しまなかった川島を措いていないだろう、という思いもありました。しかし砂田さんの舞台が心に焼き付いている私にしてみると、いったいどんな芝居になるのだろうかという心配のほうが、期待以上に募っていったというのが正直なところです。そんな心持ちを抱えながら、昨年夏、和光大学で行われた川島による「天の魚」仮公演に足を運びました。

会場の照明がゆっくり落ちると、同じ仮面、同じ黒い衣装の老人が大学のホールの薄暗がりのなかで、「あねさん」に語りかけます。「あねさん、魚〔いお〕は天のくれらすもんでござす」それまでの心配が氷解する、というとすこし誇張になるかもしれませんが、私はそこに、紛れもなくあの同じ江津野老人が座って、焼酎を飲みながら語りかけるのをたしかに見ました。四万十川のほとりで幼少期を過ごし、その後ながらく東京で仕事をしてきた一人の俳優がなにかを代弁しているのではなく、江津野老のことばが石牟礼さんの筆に宿り、それが舞台に宿ったのだ、そしてそれは、水俣の苦しみと魂の深さとによって、砂田さんだけではなく、この目の前にいるひとりの表現者にも課せられているのだ。それが私の感じたところです。

川島宏知による「天の魚」本公演も、いよいよ来る九月に迫りました。これを皮切りに、この舞台が多くの人々のところに届くよう祈るとともに、水俣とのあらたな出会いとつながりを招きよせることを念じています。

どうかあたたかいご声援をお寄せくださるよう、切にお願い申し上げます。

## ②「あねさん、あねさん」

### 『未来』2007年9月号(未来社)掲載

最首悟

「天の魚」が試行を経て本格的にこの秋再演されることになった。「天の魚」上演556回という偉業を成し遂げた砂田明さんに縁の深い人たちが関わっているのだから、どうしても再演という言葉を使ってしまうが、一人芝居という形や衣装、仮面は踏襲するにしても、中身がすっかり変わる可能性もある。ではどのように変わるのか、そもそも変わることを期待しているのか、とすれば砂田さんの「天の魚」が物足りなかったのか、いやいや、砂田さんの通りやろうとしてもそれは不可能だから、出来るだけ踏襲しようとしながら、様変わりには避けられない、してみれば、その様変わりがプラスになるのかマイナスになるかと思っているのか、でもそういう言い方はやはり砂田「天の魚」に礼を欠くことになるか、思いはいろいろとめぐる。砂田「天の魚」は回を重ねて磨かれ、完成された。その意味では、砂田さん亡き今、その復活はあり得ない。

石牟礼道子の『苦海浄土』の中の一章「天の魚」、それは二つのタイトル「九竜権現さま」と「海石」からなっているのだから、この章は胎児性水俣病の壱太郎少年の爺さまの聞き書きで、聞き手の石牟礼道子は「あねさん」と呼びかけられる。新・一人芝居「天の魚」が水俣病発生50年の2006年、「水俣・和光大学展」の期間中に試行上演されたというのも、もちろん、「水俣」に関係することを表わしているのだから、どのように関係してと問うと、相当に大きな重層的世界が出てきてしまう。それで、その内の一つの層に着いてみようと思う。「漁師」である。

砂田さんの「天の魚」を観て、「あねさん、あねさんしかわからなかった」と言った女性が居る。私の暮らしの主人公で、私は少なくとも、重度複合の〈しょうがい〉をもつ4番目の子どもの星子とこの主人公の絆を基にした暮らしを金銭的に支えるという点で、手応えのある人生を送っている。この主婦は瀬戸内海の島出身で、あるとき、「この子はどこの子、\*\*浦の漁師の子、……」と謳いながら子どもをあやした。そしてはたと止めたような気配がした。単にそこから先覚えていなかっただけでも知れない。被差別部落とともに、はっきりと漁師は差別されていたのである。もちろん、差別とは、差別しているつもりはないという意識である。差別は骨がらみになっている。子守歌を謳い出したときに、差別意識はない。しかし途中で差別に気が付いたのかも知れない。「漁師」差別はふつう、生臭い匂い、ぼろぼろの着物、放埒などで表わされる。その差別を自覚し、裏返すと、次のような表現になる。

陸の上ではなんと言っても偽善も弥縫もある程度までは通用する。ある意味では必要であるとさえも考えられる。海の上ではそんな事は薬の足しにたくもない。真裸な実力と天運ばかりがすべての漁夫の頼みどころだ。その生活はほんとに悲壮だ。彼らがそれを意識せず、生きるという事はすべてこうしたものだときらめをつけて、疑いもせず、不平も言わず、自分のために、自分の養わなければならない親や妻や子のために、毎日毎日板子一枚の下は地獄のような境界に身を放《な》げ出して、せっせと骨身を惜しまず働く姿はほんとうに悲壮だ。そして惨めだ。

有島武郎の『生まれ出づる悩み』の一節で、北海道の岩内の漁師がモデルになっている。瀬戸内海や不知火海の漁師はこれにもう少し、のほほんとかあつけらかんとかを加味する必要があるだろう。ただ、人生がいつかはと途絶えるかも知れないとするところは共通している。もう一つ、文章をつけ加えてみよう。

さて署長さんは縛られて、裁判にかかり死刑といふことにきまりました。いよいよ巨きな曲がった刀で、首を落とされるとき、署長さんは笑って云ひました。「ああ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな」。みんなはすっかり感服しました。

宮沢賢治の「毒もみの好きな署長さん」で、この署長は自分で自分を逮捕するのだが、「漁師（猟師）」の愉悦というか、私たちの古層にある血のざわめきを表わしている。山椒の木の皮を剥いで粉末にし灰と混ぜて川に流すと魚が一網打尽的に腹を見せて浮き上がってくる。みんなすっかり感服というのが賢治の鋭い洞察で、たどってゆくと、猿を狩るチンパンジーの狂騒、お祭り騒ぎに行き着く。

さて、「あねさん、あねさん」しかわからなかったという主婦の感想・概評であるが、素朴に水俣弁が皆目分からなかったと受け止めることも可能である。その余地は残しながらも、表現は短ければ短いほど何重もの意味を吐き出しているのもあって、また、概して主婦は曲者であって、辣腕ならぬ辣舌をもっている。するとこの思いは、この芝居は、あるいは砂田さんは、漁師あるいは漁師性についてすっぽかしたか、禁欲したというふうに出てくる。すっぽかすとは、故意ではないことで、禁欲はフタをし閉じ込めてしまうことである。そして、そのいずれにしても、それでよかったという思いと、それじゃお涙とくすぐりにしかならないという両様の思いが透けてくる。

お人好しでは暮らして行けない。戸坂潤は「哲学者は生活の達人でなければならぬ」と言ったそうであるが、生活の達人は、少なくとも、駆け引き上手でケチでしぶとくて、「雪に耐える竹」（和辻哲郎）の気概をもつはずである。しかし一方、人はみなお人好しで、面倒を見てやらないと思わせる可愛さをもっている。「漁師」もその面が変わりないので、作品としてそれをまず前面に押し出すということはある得る。問題はそこから先についてであって、実は見る側味わう側がそこでストップして先へ行かないということはある得るのだ。ある種の危険を察知して、歩みを止めてしまう。「あねさん、あねさん」の主婦の思いは、批評家の評とちがって、自分の方の抑制であるかも知れない可能性がある。

らち外に生きる人々への羨望と距離を置きたい気持ちが「漁師」観をつくっている。前者は不定期収穫ゆえの年貢外しという事情、後者は血のざわめきが殺しの聖と穢の両義性を産みだし、誘惑に抗するために穢の方に片寄せて差別することわり（理、言割り）に基づく。陸のらち内に居る暮らし人は自分の中に、お伊勢参りのように爆発しかねない火種があることを知っている。消そうとして消えない火種ではあるけれど、それに風を送って刺激してはいけない。極力そうっとしておくように努めることが大事だ。「柔肌の熱き血潮」を持ち出すなんて暮らし人であるはずがない。しかしそう持ち出す人に喝采を送るのも暮らし人である。

石牟礼道子はただならぬ作家であって、人間の素朴なお人好し性のその先に人を誘って行く手練、すなわち毛頭誘っている気配なしに誘って行く、あるいは首根っこを掴まえて強引に連れて行く技に長けている。「あねさん、あねさん」の主婦は、石牟礼道子の本を読まない。読む必要はないともいえる。石牟礼道子が読者を連れて行こうとする場にこの主婦はそもそも居るかもしれないからだ。しかしこの主婦は砂田さんの芝居を観に行っただけ。「あねさん、あねさんしかわからなかった」。あねさんとは石牟礼道子のことである。ひょっとして「石牟礼さんしかわからなかった」と言っているのだろうか。

### ③『十四年ぶりの公演に向けて 石牟礼道子原作・砂田明脚色 ひとり芝居「天の魚」』 『ノーマライゼーション』2007年7月号掲載

佐藤健太

はじめに

昨2006年9月15日から24日にかけて、和光大学創立四十周年記念行事の一環として「水俣・和光大学展」が開催された。会場となった新体育館内のダンス演習室において、じつに十四年ぶりにひとり芝居「天の魚」(注1)が上演された。

この歳月の開きは、かつて「天の魚」の舞台を556回にわたって演じた故砂田明が志半ばにして病に倒れ、その後、後継者がいなかったためである。正確を期して言えば、砂田の後を継いで演じたいとの申し出はあったそうだが、エミ子夫人が許可しなかったという。

和光大学展において演じたのは川島宏知。舞台芸術学院の学生時代に砂田から演劇の教えを受け、1971年から砂田が行った「劇・苦海浄土」の全国巡演に幾度も参加し、晩年まで砂田の芝居活動を支えてきたうちのひとりである。さらに言えば、川島は巡演に参加した者たちの中で、現在に至るまでただひとり演劇活動を続けてきた。和光大学展を前にちょうど六十歳を迎えた。

砂田明と水俣病闘争

このひとり芝居は石牟礼道子の『苦海浄土』(注2)の第四章「天の魚」(「九竜権現さま」「海石」の二節で構成されている)を原作とし、これに砂田が脚色を加えたものである(注3)。胎児性水俣病である江津野杵太郎少年の家を訪ねたあねさんに向かって、祖父(江津野老)がひとり語りをする。天草弁による語りが一家の受難に満ちた生を読者に生々しく想起させ、『苦海浄土』の中でも第三章「ゆき女聞き書き」とならんで圧巻である。

江津野老が抱く(舞台上は役者によるパントマイムである)胎児性水俣病に侵された杵太郎は「口はひとくちもきけん。飯も自分じゃ食やならん。便所も行きやならん。それでも目は見え耳は人一倍ほげて、魂は底の知れんごと深」(注4)く、彼は江津野老によってしばしば仏になぞらえられる。この芝居は江津野老だけでなく杵太郎も主役とっていい。

脚色および主演した砂田明は1928年に京都で生まれ、十九歳のとき上京し、東京で新劇俳優として役者人生をスタートさせた。「平均的軍国少年」だった砂田は、敗戦を機に右往左往する大人たちを見て大きな失望を感じる。「自己に忠実に生きよう」と決意し、「……突然、「役者になろう！」という、明確な意欲が、自己主張が、内部から噴き上げてきた」のだという。二十数年にわたる東京での役者生活の中で「平均的大人として戦後社会の中にちんまり納まっている自分の姿」を発見したそのころ、石牟礼道子の『苦海浄土』と出会い衝撃を受け、急速に水俣病運動に接近していく(注5)。

この時期は水俣病闘争が大きな展開を見せたころであった。1968年9月26日に政府が水俣病を公害

病と認める見解を発表し、翌1969年には加害企業であるチッソに対して、患者互助会の訴訟派が損害賠償を求めて提訴、環境庁発足の1971年12月、チッソ東京本社前での座り込みが行われた。

1970年6月に結成された「東京・水俣病を告発する会」で砂田は世話人を務め、主宰する劇団「地球座」の団員や学生らとともに、「東京－水俣巡礼団」を結成した。その後、「劇・苦海浄土」(注6)を携えて全国を巡演、その後水俣へ移住し「天の魚」の全国勧進行脚を開始する。1992年までに「天の魚」は上演556回を数えたが、砂田は病に倒れ1993年に亡くなった。享年六十五歳だった。このようにひとり芝居「天の魚」は、稀有な文学作品と水俣病運動、そして演劇人が出会うことによって生まれた。それゆえその舞台は、告発劇の色合いを濃くしていたといえよう。

別れて、またつながる

じつのところ砂田の水俣移住については、今回主演を務める川島宏知もふくめ幾人もが反対や懸念を表明したようだ。岩瀬政夫は当時の日記にこう記している。「砂田さんは役者であるということに抜きにして水俣を語り得ない。役者はどこに行っても虚構の中に生きられるということに忘れてはならない。水俣の実像を虚構に写しかえ、その中で生きることのできる人だ」「砂田さんは水俣に寄生しようとしている」(注7)水俣に惹かれ移住してしまう砂田の軽さは一種の才覚であり、その生を全うした点においてきわめて幸福な人であった。

厳しい批判を記した岩瀬は砂田とともに過ごした闘争の季節を終え、「生活の場」を水俣ではない離島に築くことを求めて別の道を歩いてゆく。そして川島は東京にとどまり、商業主義のはびこる世界で役者として生き抜いてゆくことになる。砂田の後を襲うまでに十四年という歳月を要した理由の一端はそこにある。

川島は先述したとおり、砂田の巡演に長く同行していた。参加の動機には『苦海浄土』を読んだ感動があった。「劇・苦海浄土」の巡演中、川島には忘れられない経験があるという。まだ二十代だった川島はその旅程で胎児性患者のひとりと親しくなった。水俣の公会堂で劇中ただひとりの悪役である厚生省の役人を演じたところ、その子が劇であることを忘れ川島に向かい指を指し「なんばいか！」とはげしい抗議を口にした。川島と水俣をつなげているのは、このエピソードに代表される若き日の水俣で会った人々との記憶だ。

ひとり芝居「天の魚」はその舞台の幕開けから終盤まで、仮面劇として展開される。細い目と鼻の部分のをぞき、異様に大きくぽっかりと開いた口が顔の広い面積を占めている仮面(注8)を役者は被って演じる。病に侵された一家の歴史を、ひとりでは生きてゆけない孫太太郎への愛惜を、また水俣の海の豊穡さ、美しさを語るとき、この一見無表情な仮面がさまざまな顔を見せる。

江津野老が語り疲れあねさんの前で眠りについた後、舞台は急速に溶暗し、まばゆい光とともに壮年のころに還った江津野老が現れ、生き生きと鹿児島ハンヤ節にのって踊る。この仮面がはじめて外されるのが、このラストにおける失われた幻想の時間であるのは、いっそう悲しく私の目に映る。

砂田明が演じはじめた時代と比して、現在はさらに人は病んで、自然にも他者に対しても敬う心を喪失してしまっているかのようだ。この芝居を通して人としての在り様を問い／問われ続けることは、今後ますます重要性を増していくように感じている。

#### 【注】

(1)本年9月19日(水)から22日(土)、タワーホール船堀小ホールにおいて本公演が行われる。原作

／石牟礼道子、脚色／砂田明、潤色・演出・主演／川島宏知（江津野老）、琵琶／田原順子、笛／設楽瞬山、ナレーション／金澤喜久子。主催は東京不知火座（代表 岡村春彦）。お問い合わせは、江戸川区中央2-4-18 ほっと館 石橋こどもクリニック内、電話・ファックス：03-3653-1130、Eメール：info@tennoio.jp、http://www.tennoio.jp/index.html。

(2)副題は「わが水俣病」。「サークル村」に発表された「奇病」を皮切りとして1965年から「熊本風土記」に「海と空のあいだに」のタイトルで続編を発表。1969年に講談社から刊行された。1972年講談社文庫、2004年新装版刊行。

(3)砂田による脚本「＜現代夢幻能＞天の魚」は、砂田明『海よ母よ子どもらよ 砂田明・夢勸進の世界』（樹心社、昭和58年）に収録されている。

(4)前掲「＜現代夢幻能＞天の魚」。

(5)砂田の来歴については前掲『海よ母よ子どもらよ』の「夢勸進・問わず語り」を参照。

(6)「劇・苦海浄土」は石牟礼の原作から「天の魚」の章をのぞいて演劇化されたものである。この興行に同行した学生のひとりである岩瀬政夫の日記（1970年4月27日～1972年4月8日におよぶ）によると、1971年1月25日から本格的な稽古が始まったと記録されている。岩瀬政夫『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～'72』（現代書館、1999年）を参照。

(7)前掲岩瀬『水俣巡礼』第五章「告発」参照。

(8)この仮面は、水俣出身の画家である秀島由紀男の作品をモデルとしてつくられた。

## ④ 「一人芝居『天の魚』の希望」 『季刊・水俣支援』2007年掲載

丹波博紀

昨年水俣病が公式発見から五〇年目を迎え、各所でこれを振り返る企画が立てられていた。しかし一方で、こうした一般的事実の反面、それぞれの人の生や記憶において、水俣病が余りに多様な場所を占めていると感じ、気づかされる五〇年目でもあったように思う。これは例えば、昨春に結成された東京不知火座の関係者個々人において水俣病が占める場所に関しても同様に言えることだろう。つまり、主役の川島宏知と共に、この東京不知火座を切り盛りしていくのは、写真家や会社員、文学者、学生など職種を挙げるだけでも一様ではなく、それぞれが歩んできた道のりとその内にある水俣への思いは単純に同じものとは言えない。何よりも、現在大学院生である二十代中頃の私が、他の座員と同様の記憶をもつといったフリをすることも、水俣病に関する一般的な事実ですと、その場を離れて歴史を語ることも、事実としてはしばしばそうしてきたが、それでも多少の後ろめたさを感じてきた。ただ一方で、砂田明さんの思いを受け継ぎ、この東京という場所から自分達の「天の魚」を創ろうとする座員達の思いからは、皆の心がどこか同じ向きにあることを感じさせられ、私自身もその心の向きを気持ち良いと感じている。そして、こうした心の向きはきっと水俣に触れ、そして触れたいと思う多くの人達に共通したものなのだとも思う。その心の向きとは何だろうか。

こうした心の向きを考えるために、もう少し私が最近触れた出来事について書きたいと思う。ちよ

されたばかりの方と知り合った。その方のご両親は不知火海沿岸地域の出身で、その方自身は関西地方で生まれ育っている。書くまでもないが、もちろん、こうした症例の方は、現行制度下では多くの場合すくいきれていない。そのような中、その方の言葉を色々と聴く中で、やはり一番自分の思い違いに気づかされたことは、その方自身にとって今年の水俣病公式発見五十一年目ではなく、一年目だという事実だ。その方の生において水俣病が占める場所は大変個人的なものだろうし、そもそも水俣病はその方の人生の、その方にとっての色彩を帯びているのだとも思う。また、日々の暮らしの大変さは本当のところ分からないから、だけれども、その苦しみ的一端は私の日々の生活と結び付くと思うから、齟齬は拡がり続けるとしても、多少なりとも分かりたいと思う。そしてそうした中、その方が「天の魚」を観たい、と何度もおっしゃってくれることの重大さを噛み締める。何故観たいのだろうか。それを理解し尽くすことはできないけれど、その方の心もやはり、東京不知火座の面々と同じ方を向いているのではないかと思う。

こんなことを考えながら、ふとした時に喉奥から踏み出る言葉は、石牟礼道子さんの次の句だ。

祈るべき天と思えど天の病む

かつて石牟礼さんの発案による不知火海学術調査団に参加した最首悟は次のようにこの句を解く。「救いはないと石牟礼道子は言っているかのようである。〔中略〕わからないのに、ぼーっと明かりがさしこむかのようである。ひょっとすると、すべては病むという意識は本来の、本源の区切りから発せられているのかもしれない。それは光であり、いのちなのかもしれない」（朝日新聞(夕刊)2004年6月5日 関西版)。天とは何だろうか。ここではある種の状況下で人が感じる何かしらとしておく。それは別の人の感じ方によっては、いのちであり、またはアニマや法、カミなどかもしれない。本来的にそれは超越的でありながら超越的でないものかもしれない。そして、それは時と場所を選ばず遍在しているかもしれない。そうした天すら病む時代、だが一方で厳然とした事実としてその天や、例えばいのちは日々の生活において続くことも認めなければならない。仮にこうした時代の希望は何かと問うたら、それはまさにこの続くという事実こそ求められるかもしれない。例えば、江津野の老夫婦とそのお宝息子、そして、杵太郎少年の生活において、水俣病があると共に日々の生活、そこにある天やいのちは続くのだ。「天の魚」主演、川島宏知を初めとして東京不知火座の面々の、私が出会った大阪に暮らす方の、そして、水俣に触れ続ける多くの方々の、更には現勢に対して「せぜにすめばありがたいのですが」と呟く誰も心の向く方向には、もしかしたらこうした希望のあり方やありかがあるのかもしれない。こうした希望をつなぐ一輪になるために、本年九月の江戸川区船堀での「天の魚」本公演に私は急いで加勢しようと思う。

## ⑤ 「霧が光る——ひとり芝居「天の魚」によせて」

最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007

最首悟

「彼もわたくしも何かに耐えている。この少年とわたくしの間がらはなんであるか」。

彼とは江津野杵太郎少年、昭和三〇年生まれの子である。昭和三〇年とは水俣病公式発症の一年前にあたる。彼とわたくしは何に耐えているのだろうか。わたくしとは石牟礼道子で、江津野老人か

うか。それともちがうのか。そこはなんともいえない。同じだと言うなら、彼とわたくしとの間がらはすこし狭まる。ちがうというなら、少なくとも耐えていることは同じという間がらである。

柰太郎少年は胎児性水俣病で、おじいさんはこの子は耳だけ残ったという。自分たちの言っていることはわかっているとやりたいのだ。

「少年はず（傍点あり）抜けることのできないせつない蚕のように、ぼこぼこした古畳の上を這いまわり、細い腹腔や手足を反らせ、青く透き通ったうなじをびんともたげて、いつも見つめているのだった。彼の眸は泉の影からのぞいているのぶどうのように、どこからでもぼつちりと光っていた」。

少年のこのいつも見つめているぼつちりと光っている眸のように、少年の耳もふつうの意味では聞えないのかも知れない。目も耳も口もひょっとしたら叶わないこの少年と石牟礼道子は、

「わたくしたちは、目と目でちょっと微笑みあった」。

という間がらなのである。期せずして、おじいさんの気持ちをわかって上げて下さいと、少年が言葉にならずに言い、おじいさんの気持ちをわかって上げてね、と石牟礼道子が声にならずに言い、お互い同時に言ったことにすこしばかり驚いて、微笑んだのだ。

九龍権現さまは運気の神さんで、ひきつけをよく治すのだが、柰太郎少年がひきつけを起こしたとき、治してくれなかった、とおじいさんは言う。柰太郎少年には運気がないのだ。ところが、石牟礼道子の手の平の上で九龍権現さまのうろこは反り返る。あねさんはふ（傍点つける）がいい、運気が強いとおじいさんは言う。石牟礼道子は状況投入型アレルギー性発熱を常時内発させているせいだと即物的なことを思いながらも、このときも柰太郎少年と目と目でちょっと微笑みあったにちがいない。少年に運気がなくて石牟礼道子に運気があるなどということはあるはずもないことで、でもそういうふうに見なしてしまうおじいさんや人々がかなしくていとおしくて、そしてそうさせてしまう何かに耐えている。

「少年とわたくしの心は充分通いあっていた」。

柰太郎少年と石牟礼道子が分かりあっているという間がら、場を抜きにして江津野老人の語りはない、といていい。三人居て、一人が語りかけて、語りかけられている人は、もう一人と気持ちをを通じ合わせて、そのことを通して、語る人が語り続けられるようにしている。そのもう一人が、実は江津野老人の語りの動因で、そのもう一人を育ててゆくのが生きがいで、そして自分より早く死んでもらわないと、自分は死ぬに死ねないと、思いを吐露してゆく。一人芝居という形では、語り手は見えない相手に語りかけ、その見えない相手は、さらに見えない相手と意思疎通していることが、語り手を鼓舞し慰藉してゆく。そのさらに見えない相手とは、語り手がいちばん気にかけている人なのだから、結局は語り手は語りの内実であり、主題であるところの人に励まされて語っているということになる。

となると、江津野老人は柰太郎少年に語りかけ、語ることで気持ちがほぐれてゆくという展開が、あねさんへの語りと同時に進行している、ということがあってしかるべきである。というより、この一人芝居の主人公はあくまで柰太郎少年で、その少年の野葡萄のような黒いぼつちりした目が、演ずる者にも、それを観る者にも意識されるように、演ずる者は演じなければならないということだ。

けれど、そういうことが実際に可能かという、答えはほとんど否である。柰太郎少年とあねさんが何を耐え、何を分かり合っているかが少しはわからないと、主人公は柰太郎少年と言っても何を表現していかかわからないからだ。ふつうに言えば、柰太郎少年は無力で、不憫な不治の病に罹った子どもで、父親も同じ病気とあれば、そして母親は家を出たとなれば、祖父は否が応でも一家を背負って立たねばならず、気持ちが高揚しても身体はついて行かず、愚痴もこぼしたくなるし、それだけ昔の暮らしがよく思われてくる。訪ねてきて話を聞かせてくれという奇妙な女性を前にして、あれやこ

れや、しどろもどろな姿をさらしてしまう、という構図である。かつては剛毅な漁師が、こういう一家にしてしまった企業を怨むでなく、生活保護を受けていることをひたすら恐懼して生きている。どやしたくなる一方で、その人のよさにすれっからし私はジーンとする。その人のよさを、まあ、この役者さんはよく演じると感心して、よかったよかったと帰路につく。

でもなあ、とやはり思ってしまう。私たちが入り込めないにしても、もともと健康とは対になっていない、つまり健康という考えがない病気の世界というのがあって、そこに住んでいる人たちがいるのだ。辞書を引くと嘘みたいに病気とは健康でないこととあり、健康とは病気でないことと書いてある。私たちはそういう世界に住んでいる。石牟礼道子の世界は、

祈るべき天と思えど天の病む

であり、杳太郎少年は胎児性水俣病でどのようにしても治らない。天と私たちは地続きである。どこからどこまでも病んでいるのだ。病んでいる世界では祈りはない。祈りは現状からの脱出の願いだからだ。脱出と絡んでいるなら、希望もない。でも脱出と絡まない希望はある。脱出は往々にして目的であるけれど、詩人は「目的もない僕だけど、希望は胸に高鳴っていた」（中原中也）と言っている。

ずっとずっと病み続ける。そのなかで、そうであるならそのようにと、「さようなら」と、別れることも、微笑みあうことも、慈しみあうこともできる。そしてきっと治る、きっと脱出できると思って、それゆえに喜怒哀楽に振り回される人たちを、もっと泣いたらいい、もっと怒ったらいい、もっと愚痴をこぼしたらいいと、幼子に対するように、あやすのである。

ひょっとすると石牟礼道子も杳太郎少年にあやされているのかも知れない。「天の病む」って、ことさら言うこともないのに、言わなければ済まないあなたも、やはりかわいげのある人だ、と杳太郎少年の黒いぼつちりした目は語っているのかも知れない。仏さんの微笑む目、慈しむ目も、ずっとずっと病む世界に居たために、そういう目になったのかも知れず、もはや杳太郎少年の目と区別が付かない。

それにしても、杳太郎少年と石牟礼道子が微笑みあって江津野老人を語らせている、その江津野老人に挑戦する役者が出てくることはすごいことだ。立ちこめた霧が晴れることなく、そのまま発光してゆくことを望む。

## ⑥「疵たちにつながる根——聞き書き・川島宏知」

最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007

川島宏知

### 一 砂田明と一人芝居「天の魚」

一九七〇年代の初めに砂田明さんが、砂田さんの主宰する「地球座」の勉強会で、石牟礼道子さんの『苦海浄土』という本があるんだけどという話をしました。実際に『苦海浄土』を読んでみたら、正直言って、僕はいたく感動して『苦海浄土』の台詞の部分勉強したこともあります。たけど僕は当初、キリシア悲劇の「オイディプス王」をやりたいと思っていた。実際に「地球座」内の砂田塾のみんなで「オイディプス王」の台本をガリ版で作って、稽古をやっていたんです。ゆくゆくはそれを舞台にしたいなという思いもあったんだけどね。しかし、さっきの『苦海浄土』の話になって、どういわけか「オイディプス王」か忘れ去られてしまった（笑）。最初は仮面劇という発想はなかった

けれども、水俣出身の秀島由己男さんという画家の個展が東京で開催されていたのを何人かで観に行ったところ、多分、砂田さんだったと思うけど、仮面劇でいこうか、ということになった。秀島さんの作品では色々な貝などが口を大きく誇張して描かれてて、これをモチーフにして仮面にすることに。それでフジテレビに行って、小道具さんに面の作り方を教えてもらい、「劇・苦海浄土」で被る面をみんなで一人二種類か三種類ずつ、全部で三〇くらい作ったと思う。その内の一つの面が今私が使っている面です。砂田さんが仮面劇を選んだのは演劇の一形態として面白いんじゃないかというのがあったのかな。あともう一つは結果論ですが、この劇には水俣病特有の動きが含まれていて、それは仮面を被ることでようやく表現できるものだったのかもしれない。

こうして砂田さんの発案で一人芝居としてではなく、相当に賑やかな十数名での仮面劇「劇・苦海浄土」が一九七一年に誕生して、新宿駅前の歌舞練場を皮切りに静岡や名古屋、大阪、神戸と全国を回った。それで広島公演が終わって、いざ九州に入ろうという時に、みんなビヒツちゃったんですよ。九州最初の公演場所は九州大学の講堂だったけれど、その時に砂田先生が一番最後の場面は、何を言ってもイイから、それぞれの思いを一番最後に言おうと。亡くなった患者さんの名前を呼んでもいいし、舞台を掃けようという話になったんです。それで芝居が終わり裸足で客席に下りていったんですよ。亡くなった患者さんの名前をワアッて呼んだりね、講堂の外までずっと行ったんですよ。その時ね、お客さんの反応が、なんかこう今までにないようなものを感じたんです。そして外の玉砂利を裸足で歩いて楽屋に戻りましたが、客席のざわめきが聞こえないんですよ。何なのかなあという思いがあったんですよ。そしたらね、主催者がお客か帰らないから、舞台に出てくれと、慌てて飛んできました。それでみんなで舞台に戻ったらね、スゴイ拍手だったんですよ。「恐ろしいまでの沈黙が続いた」と翌日の新聞にありました。とは言え、そもそも芝居の下手な役者が多かったのです。自分も含め、にわか役者もいたし。だからね、やっぱり芝居は演技じゃないの。その時、僕らは必死だったんですよ。その一生懸命さが伝わったんじゃないかな。

その後、福岡、大分、鹿児島と巡演して能本入りをするんだけど、僕は幼児性の患者さんの渡辺栄一くんとすごく仲良くなってね。いつも僕のそばにくっついてた。彼とは一〇幾つくらい年齢が離れていて、彼は当時、小学校高学年か中学校くらいじゃなかったかな。その彼が、巡演最後の地、水俣の公会堂に観に来るんだけど、僕らにとって水俣の公会堂は本当に恐かったねえ。その時、僕は厚生省の悪役をやってたんですよ。一人で。それで厚生省の役人が居丈高に上からものを言うような感じで患者さんとか、そういった者たちを蹴散らす、そういった役をやっていたんです。その時にね、栄一くんが舞台の一番前で突然立ち上がって、僕に向かって、「なんば言うか！」と言って指を突き出したんです。栄一くんは幼児性の患者さんとして育ち、周りからも親からも言われていたんだと思うんです。結局、自分の身体がこうなったのは、この人達のせいなんだってね。栄一くんは、いわば現実の世界に入っちゃったんだよね。その時、僕はビックリしちゃったよ。演技が止まったかは知らないよ。だけど栄一くんが立ち上がって、抗議をしているということを僕が認識したということは、僕はその瞬間、素の自分に戻ったんだよ。栄一くんの存在を認識したということだから、一瞬でも。だから、そういった意味では僕は役者としては失格だよ。

「劇・苦海浄土」の巡演が終わり、翌一九七二年春に水俣へ移住した時に、砂田さんは僕に水俣から都会に「オイディプス王」をもってくると言っていた。「オイディプス王」の解釈は人それぞれだけれども、オイディプスの罪障感の強さが砂田さんにも通じていたのだと思う。水俣への移住を砂田さんに誘われたけど、僕は東京に残りました。そして、砂田さんは水俣移住後、砂田さんにとっての「オイディプス王」と言うべき一人芝居「天の魚」を作るわけですよ。そして、大々的にやることになり、その芝居作りに東京にいた僕や宮本成美氏（写真家、「天の魚」プロデューサー）、それに岡村春彦氏も参加した。僕はその舞台監督も含めた立場として再び砂田さんと共に行動するようになりま

す。それでまずはね、台本を手直ししに砂田さんの自宅に行くんだけど、僕たち、前の晩に乗り込んで、それで翌朝起きたら、近所の漁師の人が朝早くからね、魚を穫ってきてくれて刺身を台所で作ってくれていたんですよ。で、その時にね、僕たちは台本チェックをやっていたんだな。しゃかりきにね。その時に漁師さんが調理しながら淡々とね「砂田さん、あの『天の魚』の芝居の中で、船の上で刺身を食べているシーンがあるけれど、そんな体験ありますかあ？」って言うんだよ（笑）。僕はね、思わず砂田さんの顔をフッと見たんですよ。そうしたらね、シラッとしているんだよ。あれえ、感じてないのかな。あえて動揺を隠しているのかなって。僕は未だもってそれが謎なんですよ。生きていた内に一度聞いておきたかった。役者としては恐いことですよ。だけど、考えてみれば殺人の役を演じる時に、「お前、人を殺してこい」とは言えないよね。それは難しいところで、今、「そんなことをやったことがありますか」というのは、それはもろ僕にもかかってくるんですよ。ないわけですよ。

## 二 「天の魚」を復活させる

「天の魚」を復活させようと思ったのは、砂田さんが亡くなってから一三年経ち、「天の魚」が立ち消えになっていたということもあるけれど、ちょうど二〇〇六年に僕の年齢が母親の死んだ年齢に達したこともありまして。それと一三年前の砂田さんの葬式の時、納棺がそろそろという時に、僕はポツンと母屋から少し離れて立っていた。すると蝶がね、屋根を這うように一頭飛んできてね、屋根の上をひらひら舞いだすの。すると、もう一頭ひらひらと飛んできたの。そしてもう一頭。合計三頭になってね、クルクルひとつの円を猫きながら舞うんだよ。南洋では蝶は先祖の霊を連れて来ると言うよね。その時、多分、納棺の時だろうと思うけれど、その真下の部屋から不意にお連れ合いのエミ子さんの「アキラっ！！」って声が。しかも蝶々がその屋根の上を飛んで、何か本当にこう、あの屋根をつんざくような高い声で「アキラ」という声が聞こえてきたやっただよ。その蝶々の描く輪の芯を突き抜けて、天に届かんばかりに……僕は砂田さんに最後のお別れをしたかったけど、顔を見たかったんだけど、行けなかった。僕は何で行けなかったのか分からないけれども、胎児性の患者さんや第一次訴訟の人とか、そうした人たちが外に一杯来ているんですが、乙女塚に上がる階段のところから離れて自分がポツンといるのがね。後ろの方で「お前何してるんだ」、「お前何してるんだ」というのがさあ、自分の胸の中でね、何でこんな、こうしていいのかと。本当は行きたいんだけど、人ごみを分けて。「逢わせてください」のひと言が言えなかった。そう思った思いで、みんなから離れたところで見えていたんですよ。この蝶の吊いの舞を目撃したのは、僕ひとりだったんですよ。それらのできごとが僕に決意させることでもあった。

それでやるって決まって、エミ子さんのところに衣装や面を借りに行きました。それでね、お面を見せてもらったんですよ。下の頭巾の部分が三つ、風化しちやって白いんです。口のところと鼻のところが。僕はね、それは借りられないと思った。闘ったんだなあって思って。すごく闘ったんだって。その時、自分は演れないと感じた。怖くって。

だから現時点の僕では水俣公演は考えられません。第一、水俣でやるということは怖いこと。だからこそ、水俣で演れるようになりたいけれどね。でも中途半端にはやれない。僕はまず石牟礼道子の世界が好きなんです。だから石牟礼さんの世界を壊してはならないという思いもあるし。そんな中、最終的に決意できたのは、告発劇としてではなく一つの演劇として成立させたいと、宮本氏と意見が一致したおかげでもある。今年の「水俣・和光大学展」での公演には多くのお客さんが、社会的問題に関心のある人たちが来てくれたけれど、僕は何よりも演劇的に成立させたいと思っている。新聞の文化欄に出るような。水俣の芝居っていうと暗いって思われるでしょう？ だからまず、水俣病に意

識のない人に観てもらいたい。

ところで、砂田さんの「天の魚」は夢幻能で、夢幻能よろしく江津野老は亡霊ですが、その意図はよく分かるのだけれども、僕は砂田さんの演劇観ても、台本読んでもそういう風には観れない。僕が今回の「天の魚」でこだわり修正や潤色を加えたのもここに関わる。砂田さんの場合、水俣居住者としてそうせざるをえなかったのだろうけれど、肝心な部分がカットされています。それは嫁さんと婆さまが喧嘩する場面。なんで江津野老が一家の舵取りをしているのか。普通漁師の家というのは、おっかさんが強いんですね。ところがこの中では婆さまというのは本当に寡黙で、いるのかいないのか分からない感じでしょ。それで跡とりの清人は清人で何も物を言わないで、いわゆる口がもつれて見苦しかと言ってあまり喋らない。僕はその原因はここにあるんじゃないかと思ったんですよ。原作では江津野老が孫たちを連れて、さち子に戻ってくれと頼みに行きます。だけど「帰らん」と言い切ったわけです。すでに男もいて、子どももできている。多分、江津野老は「分かった。そこまで言うならばわしが育てる」と言ったと思うんですよ。だから、舵取りをしたのは江津野老だと思う。そして、婆さまからすれば、嫁を出しだのは私のせいだ。だから後ろめたさというか、少し引くところがある。清人は清人で、男として、嫁さんに逃げられた。清人の体は萎えとることになる。だから、僕は台本に「よっぽど良か男でもできましたじやろ」という台詞と、婆さまの負い目を入れたんです。水俣の人が病気になる、一家が崩れ始め、どこかでねじれていく。そのねじれを直そうとするのが、もしかしたら江津野老なのかもしれない。だからこそ、最後の頼みどころとして神がある。いや、神様とするのかな。そこらあたりにある石とかね。さち子の写真や水子の石がどうして飾ってあるかということも僕は入れてしまったんです。だから正当性を持たせるために「あの水子たちも寂しかろうと思うて、あげんしてさちの写真と一緒に飾っておつとでござす」という台詞を挿入しましたが、普通だったら写真なんて飾れない状況だと思う。これを入れないと、そのバックボーンがどうしても見えてこなかった。これで江津野老の思いが伝わると思います。

今回、「天の魚」をやっていて最初から幸せ感を感じてきました。何故かと言うと、空があねさんの膝に来たり、柱のはじからのぞいているシーンがあるけれど、姉さんをのぞいている空の顔。空が見ているのがいとおしいんです。だから僕はそういった意味で幸せ。空が見える状態が一番幸せかと思う。空か顔をのぞかせている、あの何ともいえない瞳をしてね。想像しただけで幸せを感じるというか。長い役者人生だけでも今までにない。「水俣・和光大学展」での試行公演の際、四回目の時に空が客席の柱の間からヒョッと見えた感じがしてね。でも蛍光灯のもと、空の先にお客さんの顔が見えちゃったというのはもうやりづらくてしょうがなつたですよ（笑）。気は散るし、空間をどこにもっていったらいいか分からないからさ。あねさんの手がどこにあるのかとか、あねさんの目がどこにあるのかというのは、結構設定しやすいんですが、その先にたくさんの目がね（笑）。

### 三 石牟礼道子の水俣世界へ

『苦海浄土』や「天の魚」など石牟礼道子さんの作品には、台詞の部分と文章の部分、あと記録的・医学的な部分があります。この三つどれにも石牟礼さんの世界が入っている。例えば解剖の場面にしても普通なら汚らしくなるんです。けれど、石牟礼さんのはそう感じないんですよ。それは石牟礼さんの患者さんたちに対する愛情。愛情があるからああいった文章になり、汚いと思えない。それで、江津野老の家にしても隙間から風が吹き込んできて、神棚には舟板を打ってあるけれど、その埃っぽさとか、汚いというのがやはりあるんだけど、そういった感じがしません。でも、見事に状況が表現されている。人や海に対して愛情がある。逆に僕が石牟礼さんの世界やその言葉の持つ重みを壊すんじゃないかという思いはある。でも、石牟礼さんは言ってくれたんですよ。「いいんです

よ、川島さんのところの田舎の言葉でいいし、自由にやってください」って。けれども、やはり石牟礼さんの言葉は愛情の表われだと僕は思っているから、とても変えられない。だからそれを壊さないように、自分なりの表現で石牟礼さんの世界をどうやって成立させるかがこれからの課題です。僕が惚れている石牟礼さんの世界、文章というのは多分そういった愛情があるからだろうなと思ってるけど、同じような愛情を持てるかと言うと僕は持てないだろうし、やはり石牟礼さんの視線には、石牟礼さんの天草、水俣の風土の中で育ったというのが多分にある感じがするんです。それにはかなわない。あの人は五つも六つも目を持っているように感じます。あの人の文章は、何て言うか根を張った言葉に思えるんです。たいていの作家というのは想像の域を越えないところで表現しているけれど、石牟礼さんに僕が惚れたのは、僕も高知でそういった体験をしているから分かるけど、それを見事に表現しているというのは、やはり愛情があるからこそだと思うんですね。「川島さんのところの田舎の言葉でいい」というのはその裏返しだろうけど。

少し話は外れるけど、僕は植物が大好きで、植物の本などを読んでいると樹の調子を診るために聴診器を当てるといのが出てくる。実際に聴診器を当ててみれば、樹が水分を吸い上げる音は季節によって違い、葉っぱの青い時と少ない時では違うということが分かる。いのちって何かと言ったら川なんだ。水の通っている川がいのちだと思う。川は血管であり、その流域に暮らす人にはいのちそのものだと思う。だからその血管が汚されたのが水俣病や新潟水俣病でもあり、足尾銅山もそうだし。川は大動脈と言うよね。やはり樹と同じだと思うんですよ。樹の中にも川が流れている。血管だと思うんですよ。

これにはやはり幼少の頃の高知での体験があります。子どもの時は平穏よりも、どこか抜けていることって好きですね。結局、僕たちは川とか山で自然と戯れたり、夏になると裸足で六、七キロ、鮎とかダダ（うぐい）を追って川を上って行くんです。泳いだり、熱くなった石の上を歩きながら。それに似たトキメキと言うと、お祭りですね。運動会も田舎のお祭りの一つかもしれない。あとはクリスマスか、盆踊りの時とか、もう一つ肝心なのは天変地異。何故かと言うとね、師走になると、大人たちが次の年に向けて何ていうかわさわさ慌しくなるじやないですか。そして、台風の前も慌しく戸板を打ったり。大人たちが急にこう動き出す気配というか、それを見るのが好きだったね。すごくワクワクするんですよ。台風になると農家の人たちは田んぼの様子を見に行ったり畦道を直したり、大変なんですね。うちは農家じやないから、その分、台風になるとね、本当にワクワクするんですよ。洪水になって平穏な村が一変する景色を、橋の上から一日中眺めている。飽きないんです。川はいろんな表情を見せるから。丸太とか、根こそぎえぐられた葉をつけた木が回転しながら流れてきたり、違うんですよ、なんかね。その動きを見ているのも大好きだし、あとね、家の裏に小高い山があって、椎とか、樫の木があるんですよ。これがね、風に、台風の風が吹くとね、バアツとね、一面ね、銀色の世界になるの、山が。風向きによっていろんな銀色を見せるんです。テレビのコマ変わりのようにね。ドキドキしながら覗くんです。戸板の穴から。子どもにとってはお祭りなんですよ。僕なんかは本当に自然と一緒に暮らしていた。

不知大海とは風土の違いはあるけど、石牟礼さんが書いたことは僕の心にすごく響きます。いのちって何だろうなと考えるよね。そして、石牟礼さんは何て言ったらいいのかな、土があって、樹や花がある。普通みんなは土から上の目に映る部分だけしか見ない感じがするけれど、石牟礼さんは樹の根っこを見ている感じがする。根っこの存在は樹によって違うわけだけれども、何がいのちかと言うと、絶対に見た目のキレイさではなくて、キレイな花を咲かせる根っこの方だと思う。それが分かるのが石牟礼さんじやないかと思う。最近は四万十川もテレビに流れるものだから有名になってね、それで観光客が来るとそれを相手に商売する人が出てくるわけだよ。そうするとエビなんかもねこそぎ獲ってしまうからいなくなる。昔が懐かしい。

だからそう言った意味でも、石牟礼さんの「天の魚」というのはやる意味があると思う。どこかで気づかせてくれるものがあるんじゃないかな。「あねさん。魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんをただで、わが要ると思うしことってその目を暮らす」という船上のシーンがまさにそう。沖の潮で米を研ぎ、「かかさま、いっちょ、やろうかい、ちゆうて、先ずかかに（酒を）さす」の「先ず」という言葉がね。かかに対する愛情みたいなものが「先ず」という言葉にね、僕はすごく感じる。あてのない、賭けにも似た漁のあと、まして、大漁のあとの心地良い疲労感が人の心を優しくさせるのか、それとも、周りかすべて自然の中ではほんの点にすぎない二人が、そこに存在することによってそうさせるのか。かかさまと自然にそう呼ばさせる、そして、この先ずもそうさせるのかな、と思います。これはまさに天上世界みたいなものですね。こういった自然の恵みが人間を素直にさせると思う。例えばもしかしたら子どもたちが観てくれて、自然っていいなって感じてもらえれば、それだけでも僕はいいと思う。もしかしたら水も大切にしてくれるかもしれないし、第一、潮水で米を研ぐシーンで、海汚しちゃダメだなどと思う人がいるかもしれない。仮の想像ですけれどね。いてほしい。少なくとも一人でもそういった、芝居を観てくれて思ってくれる子が一人でもいれば、僕は演じる甲斐があると思う。だけど、それじゃデリカシーがない。芝居として観てほしいけどね（笑）。唯一の救いはそこにあるのかもしれない。僕は水俣病もさることながら、これをキッカケにもっと広く深く多様な目をもって、物事を見てもらえるようになってもらえなあと願っています。それが石牟礼さんの気づかせてくれるところだと思う。

地域や文化は違えども、物事というのは一つ一つがつながって想像させるものがある。だから一つの、例えば僕の場合、高知の片田舎での体験によって、石牟礼さんの水俣世界につながることもできる。どっかで樹の根っこと同じでね、つながっているんですよ。だから桜たっさ、一本では桜だつて先に咲かないんだよね。何故かというどっかで会話をしているんだよ、根っこの部分で。そろそろ咲こうかと、「人間どもに気づかれぬようにそつと」とかね（笑）。僕はそう思っているんですよ。桜はだいたい同時に咲くじゃないですか。人の目に触れている葉っぱより根っこの方が大事なんですよ。その土の中の世界を石牟礼さんは分かっているからね。

火は語らずして友を作る。その火のような存在の舞台を創りたいなあ。

## ⑦ 「砂田明という役者がいた」

最首悟・丹波博紀編、『水俣五〇年』、作品社、2007

星埜守之

私が砂田明の舞台を最初に見たのは、一九八〇年の十二月、東京大学文学部学生ホールでの公演の折である。「海よ母よ子どもらよ」と銘打たれた二部構成の一人芝居で、第一部は歌あり踊りありの大道芸風の舞台「海の胎」、そして、第二部が石牟礼道子『苦海浄土』の一章をもとに、老人が水俣病に冒された一家の来歴を切々と語る仮面劇、現代夢幻能「天の魚」である。砂田の全国を股にかけての旅芝居はその一年ほど前からスタートしていたが、私はたまたま東京大学公演の企画・組織・設営の中心になっていた友人から声をかけられたことから、当日の舞台設営等の手伝いという形でこの芝居にほんの少しだけかかわり、初めて砂田の公演を、しかもごく間近で見るという機会を与えられたのである。

沖縄風のリズムと音階に乗った主題歌「いのちのうた」（「海のなかに 母がある／母のなかに

海がある…」) で賑やかに開幕し、巡礼姿での最初の水俣行の折にも朗読されたという詩／檄文「起ちなはれ」の朗読、水俣月の浦の胎児性水俣病の少女への思いを籠めたマンドリン弾き語りの唄「月の浦の乙女」と詩「月の浦のジャンヌ・ダルク」、そして夫婦揃ってのユーモラスな踊り「ムツゴロウどん」と、重苦しいテーマと軽快な歌舞の緩急を織り交ぜて第一部が終わる。

十分ほどの休憩ののちに、会場の明かりが徐々に落ち、「天の魚」と記されためぐりの上にひと時のこってから消える。真っ暗な闇が観客を包む。闇のなかに流れるナレーション「一九六四年。日本中が東京オリンピックで沸き立っていた昭和三九年の初秋、わたくしは百間港に近い水俣市江添の丘の上に、江津野奎太郎少年とその一家をたずねました…」やがて、琵琶のゆっくりとした響きとともに、口を丸く空けた石の色とも木の色ともわかつたぬ面をつけた黒衣の登場人物が、舞台下手から亡霊のように姿をあらわす。胎児性水俣病患者として生を享けた奎太郎少年の祖父である江津野老…

全体で2時間をゆうに超える舞台からそのとき私がなにを受け取り、自分のなかになにが生まれたのか。もう二十五年以上前のことなので(いや、むしろ、二十五年もたったにもかかわらず)あまりうまく語ることはできそうもない。闇のなかで語られる言葉に耳をそばだて、仮面や仕草のなかに宿る幻の光景に目を見張りながら、言い知れぬ慄きにとらわれている二十代の若者が、そこにいたことだけは確かなのだが。ただ、記憶のなかをもう少し探してみると、仮面劇だけではなく、生身の砂田の華奢な(というふうに見えた)肉体から搾り出される叫びのようなもの、とくに劇の第一部で朗読された「起ちなはれ」、あるいは「月の浦のジャンヌ・ダルク」といった詩も、やはり私のなかのなにかを大きくゆすぶったのだと思う。

もちろん、舞台のメインイベントともいえる「天の魚」の、黒衣で身体を隠し、仮面に言葉を語らせる演技のどこか荘厳ささえ感じさせる時間が大きな衝撃をもたらしたのはまぎれもない事実であって、これも初めて耳で触れる天草言葉に乗せられて、水俣の「苦海」と「浄土」がそこに鮮やかに幻視されたはずである。それにくらべて、大道芸らしい猥雑さとあまりに性急に水俣を体現しようとするような悲壮さとを併せもった第一部は、水俣の人々の測り知ることのできない受苦に思いを潜める人々の目には、なにか危ういものを感じさせかねないかもしれない。だがそれでも、「起ちなはれ」で砂田明がみずからの決意を吐露し、あらゆる人々の決起を促すときの、疼くようなその言葉のひとつひとつが、当時ナイーブな(と言っておこう)学生だった私の胸に容赦なく突き刺さったことが、いまや徐々にはっきりと甦ってくるようだ。「天の魚」の仮面の向こうに深々と広がる世界からうける静かな衝撃と、いま目の前に「旅芸人」という身体をそなえて存在している砂田明その人と一仮面と生身とが表裏一体となった、砂田明という謎とでもいうものに、強くひきつけられたのだと思う。芝居のあとの交流会に参加しながら、近いうちに砂田の住む水俣市袋神川を訪ねることを心に決めていたことも、そんな思いに駆られてのことだったのかもしれない。

〈転成〉一九二八年に京都に生まれた砂田が、東京でほぼ二十五年間商業演劇の世界に身を置いたのちに、一人芝居をもって全国を行脚するようになるまでの半生については、砂田自身がその著書『海よ母よ子どもらよ』で語っている。貧しい母子家庭に育った少年が、商船学校を終えたあとに一念発起して演劇の世界に飛び込み、高度経済成長期の狂騒のなかであらたな演劇を模索して苦闘した末に、『苦海浄土』との出会いによって決定的な転回を迎えるまでの回想の記をそこに読むことができる。これを読んでいまさらながらに強い印象をうける事柄のひとつは、砂田明がまず第一に役者であろうとし、徹底的に役者であることにこだわり、また、役者であることを決して手放そうとしなかったことである。十九歳で「芝居という、企図して仕組まれた物語世界に飛び込んで、いろんな人物に扮してさまざまな人生を生きてみたい。そうして、アテにならない現実世界に一泡吹かせてやりたい。生涯、何者にも呪縛されず、一筋に役者でありつづけたい…」と決意し、六十年代の「繁栄

バンザイ派ばかり」の演劇界にあつては「役者こそがその全身心を材料にして時代を批評的に映し出せるのに」と齒嚙みをし、その後もみずから「役者馬鹿」と呼んで憚らない砂田の姿勢は、晩年まで見事に貫かれていたのだと、つくづく思い知らされる。

そんな砂田に演劇上のひとつの転機が訪れたのは、六十年代末、「若者の反乱の時節」の折であつた。砂田の出身校であり、当時は講師を務めていた「舞台芸術学院」の教室の片隅に「Sは体制的人物である」と記された小さな落書きがあるのを目にした彼は、「結局は時流に乗って、合わせて、適当にやっていく、あの大人達に一人になった“私”」を発見し、転身を決意する一若い世代とともに「戦後社会を文化的に点検する作業として“演劇”をつくってみよう」。そうした決意とともに旗揚げされたのが劇団「地球座」である。当時の地球座については、いまのところ手元に資料がないのではっきりとしたことは言えないが、石牟礼道子『流民の都』（「晴れの日の紅をさして」）に引用されているところによれば、その公演パンフレットには「一日本人観客が意識しない核心において新劇を拒否するまなざしの反映であるのかも知れぬ、舞台上のうろんなるものである私一」、「マルクス、サルトル、スタニスラフスキーやブレヒトを知る前の成心なき世界と対面していた自分をとりもどしたい」、「透谷、啄木、夭折した二人の詩人の直感をたて糸に、漱石、龍之介、光太郎、朔太郎をよこ糸にして、日本の、かくされた、真の近代をさぐる」等と記載されていたようである。また、演目としては「羅生門」、「天上縊死」、「檜山節考」があり、砂田によれば「曾根崎心中」の演習もおこなっていたという。演劇を通して（たとえば新劇にみられる）日本的な近代を問い直そうという企図を透かし見ることができる。

「はたちそこそこの若い人達と組んで直接民主主義による劇団と芝居づくりに取り組んだ」（『海よ母よ子どもらよ』より引用、以下同じ）という地球座の構えは、その後の水俣巡礼や「劇・苦海浄土」にも形を変えて踏襲されることになるが、舞台づくりは試行錯誤の連続だったようだ。そして、七〇年四月に上演されることになる新たなハムレット劇の構成を模索するぎりぎりの葛藤と「一寸先が分からない直接民主主義の実践過程」のなかで、砂田は石牟礼道子『苦海浄土』と決定的な出会いをはたす—

「石牟礼道子さんのこの本は、私にとって実に豊かな、美的な、ということは根源的〔ラディカル〕な、出会いであり体験でした。水俣病の惨鼻をみる視角も、患者をして語らしめる文体も、これまでのどんな文学（詩・散文・戯曲・歌謡）にもみられない劇しさとみづみづしさを併せ持っており、読者は（私は）自らの内部に忽然と未知の世界が展げてくるような戦慄を、あるいは古くて遠い記憶の底の部分呼び醒まされるような感動を味わうのです。とりわけ「ゆき女聞き書」と「天の魚」の章には劇的カタルシスがあり、そのことが私達の「ハムレット」の構造や方法に欠けていたものを暗示していると思いました」

「石牟礼道子という人は、“水俣病を生きる”というたたかいを提起したとはいえないでしょうか。〔…〕彼女からの促しはつねに、“私を立てる”という方向に人を活性化するんです。その結果、促しを受けとめた人が、一見利他的な“無私”や“献身”の行為をとろうとも、その人の内部では“私”が完全燃焼している。本源の個性がいきいきと目覚め、かつ、自足している。これこそが、芸術の美的効果の最深の働きでありまして、古来、呪術の効能も、悲劇の効果もそういうものとして求められ機能してきたものに違いありません。今後私が、なおも役者であり続けようと願うなら、私は「ゆき女」と「天の魚」によって観客にカタルシス＝美的蘇生感を与えうる者になるほかないと、『苦海浄土』の前で私は決意したものでした」

『苦海浄土』の世界が水俣病そのものの惨状と、近代を謳歌してきた自分を含む人々の水俣病との共犯関係に目を開かせ、砂田を「東京・水俣病を告発する会」へと、そして水俣へと赴かせたこと、そうした、人としてのやむにやまれぬ行動に導いたことは疑いえないが、その一方で、『苦海浄土』との出会いは砂田明という演劇家の転成であったこと、もしかすると第一義的にそうだったかもしれないことを、これらの回想は十二分に語っているように思う。あるいは、役者という人生を徹底的に引き受けた以上は、そして、そういうあり方をもって水俣と寄り添ってゆくことを必然として受け入れるのなら、『苦海浄土』との出会いはなによりもまず役者としての転成として生きられなければならない、とも言えるだろうか。自らの存在理由／役者としての存在理由を、砂田は『苦海浄土』を通して探り当てるのである。

〈巡礼〉水俣との精神的な出会いを得ると、砂田は直ちに行動に打って出る。七十年六月二十二日におこなわれた「東京・水俣病を告発する会」の結成集会に、砂田は手甲脚絆に菅の笠を被り、白装束で参加する。初めての水俣行を巡礼姿で果たしたい、という決意を込めてのことである。三ヶ月ほどかけて、単独で勧進の旅にでかける。水俣の人々への浄財を募りながら、演劇の起源としての呪術的なものを生きなおしてゆく。そういった構想のなかには、のちの「天の魚」の旅公演の輪郭がすでに描かれている。また、「巡礼」である以上、目的地である水俣は聖なる地でもあっただろう。さらに、巡礼であると同時に「勧進」として旅立つのであれば、それは伝統的に日本社会の最周縁部に位置してきた存在に身をやつすことによってしか、近代化のこれもまた最周縁部で水銀被害をうけた人々のもとに赴く方途はないと思いつめたからではないかと私は推察する。

実際の旅は、砂田の旅への参加を申し出た若者たちを含めた総勢十名の巡礼団というかたちで敢行された。七〇年七月三日、砂田は大学生、若い演劇家やカメラマンを含むメンバーとともに、白衣の巡礼姿で丸の内チッソ本社前から水俣へと向かう九日間の旅に出立する。国鉄の乗車券の八日間の有効期限と途中下車を駆使して、東京、川崎、横浜、富士、名古屋、四日市、京都、千里が丘（万国博覧会）、大阪、神戸など十九の町の街頭でデモ、ビラ配り、カンパ活動をおこない、七月九日には熊本で「熊本・水俣病を告発する会」と、水俣から水俣病裁判第五回公判に赴いていた患者さんたちと合流、翌十日に熊本地裁での裁判を傍聴したのちに水俣入りし十二日に解団、という強行軍だ。

水俣巡礼について、石牟礼道子はこう書く―「東京から、熊本へ、そして水俣へ、というコースは、たとえば、広島への大行進、沖縄への行進という図式を経てきた戦後の〈原点思想〉に、いやおうもなく、根ざしていることにわたくしは気づく。收拾の見とおしもつかなくなった産業犯罪の頻出横行の中で、民衆の怨恨はようやく広く深く確実に潜行しつつある。〈公害問題〉はいまや国民世論の主要テーマにさえなった。このようなとき、ひとつの〈おかげまいり〉的流れをつくってゆく巡礼団は、その道中にさまざまな、善意ある人びとのエピソードにつつまれ、かなりのボルテージを保ちながら、現地に（あるいは聖域に）到着するであろう。／「気が遠くなるような不知火海の美しさ」が人々をむかえいれ、現地の人びとは、遠来の客人を手厚くもてなし、巡礼団は、〈浄土まいり〉の酔い心地から、しばらくはさめやらぬ。たぶん初発の巡礼団は、そのようにむかえいられる」

（「晴れた日に紅をさして」）。透徹した記述である。そしてこの言葉の通り、巡礼団は旅をし、水俣に迎え入れられたとあっていいだろう。ただし、すでにこの時点で石牟礼が「後々発の巡礼団が、水俣へ水俣へとくるであろう。『公害問題名士』たちをも伴って」と書き、「東京・告発」について併せて述べたうえで「さて、このように書いてきたことは、水俣病患者にとって、あくまで、日常世界の外側の、活字の、ジャーナリズムの、または一般世論の世界のことがらにすぎない」と続けていることも忘れてはならないが。

巡礼の地にたどり着いたあと、砂田はふたつの事柄に邁進する。ひとつは劇「苦海浄土」の実現へ

向けた構想であり、もうひとつは水俣への移住である。

「劇・苦海浄土」は、砂田を中心に十数名のメンバー（当初十四名）が役者兼裏方として参加し、七一年四月十日の東京公演を皮切りに、二週間ほどで名古屋、京都、大阪、神戸、広島、熊本など十一の都市を巡演する一種の仮面劇で、入場料の代わりに一人五百円以上のカンパを集め、「苦海浄土基金」の一部として患者への資金援助にあてるといふ、演劇巡礼の趣を帯びたものであった。『苦海浄土』の「ゆき女聞き書」に想を得た「ゆき女始末」や、漫才風の掛け合いで公害や差別のことをそれぞれに語りだす「いんゆてろ」などの部分から構成された舞台は、四月におこなわれたこの第一回巡業のあとにも各地で演じられ、この年の秋まで継続される。当時の新聞には砂田の言葉として、「いわゆるお芝居ではありません。死者の霊をまつる御霊会〔ごりょうえ〕です」という記載が残されている（朝日新聞三月二〇日）。

それにしても、無数のものたちの凄惨な死と終わることのない受苦をもたらした水俣を舞台に上せることはいかに可能なのか。患者でない者がその苦しみを「表現／上演」することがそもそもできるのか。もちろん、『苦海浄土』という本が動かしがたく存在していることは事実だが、水俣に暮らす作家ではない、東京の役者である砂田や、学生などからなる参加者たちにながができるのか。参加者のあいだでは、こうした事柄が厳しく問われ、議論されたという。また、交流会では、劇中にある部落差別問題についての言及について観客からの批判が起るなど、参加者にとっては試練の旅であった（岩瀬政夫『水俣巡礼』）。ならば砂田自身はこの劇をいかに位置づけようとしていたのか。

〈劇による告発〉砂田は「苦海浄土」を初めて読んだときからこれを舞台化することを思い描いていたが、先ほどの「御霊会」という言葉にもあらわれているように、早い時点からこれを「水俣病で倒れた死者たちの霊をまつる」というかたちで考えていた。砂田から七〇年の巡礼の前後に石牟礼道子へ宛てられた手紙にも「招魂の秘儀」という言葉が書きつけられていたようだが、そうした志向を私たちは砂田が巡礼のほぼ一ヵ月後に書いた文章にも読むことができる。

「死者への鎮魂は、残された者の魂ふるいによるほかはない。死者の無念を存念を痛苦を剩すところなく生き身にうつしとらえる。あたかも呪術師や霊媒たちのように、自らの「個」を破碎した「空」なる場に死霊怨霊を迎え入れそのものをして語らしめる。語られたことばは聴き手をつき動かし彼によって生きられることで鎮魂になる。

ところで私は今、この呪術師と聴き手とを一如とした個の新しい生き方としての鎮魂を考える。霊媒自身の中における個のよみがえりによって果たされる鎮魂を。酷薄なる近代文明の法体系の中で絶息寸前にある個がひとたびは完全に破碎されることで「法」そのものを空無と化し、死者の声のみ高らかな無法の闇の中で新しく生き始めようとするとき、そのものたちへ託される鎮魂の「道行」があるのではないだろうか。」（『祖さまの郷土 水俣から』より、以下同じ）

鎮魂はまた、水俣を犠牲とする「近代」の余禄を食んできた東京の人間の贖罪の道と重ねあわされる—「私たちが水俣漁民の惨苦をつい最近まで坐視してきたことは天下に隠れもない。そのことに罪を自覚するかしないか。自覚したものが贖罪の道を歩むのは当然であるとして、その歩みの中に贖罪の不可能性をかみしめふみしめているかいがないか」（23）。

贖罪の不可能性。それはさらに、表現の不可能性とも重ね合わせられるだろう。砂田は別の文章のなかで、「真の劇」を「あらゆる扮飾をはぎとられた人物が死ぬよりつらい生のただ中に在ってどう行動するかを見るもの」とし、「真に劇的な人物」がじつは水俣病患者そのものであるとした上で、こう述べる—「劇・苦海浄土の場合は、ですから、患者さんたちの受苦を表現することが主眼ではありません。だれしも言うとおりのわれわれは患者さんにはなれません。事柄は、わが身をつねって人の痛さを知れなどという諺の範囲をこえていますから、なまかな想像力などは、そこから生まれる写

実などは醜悪でしかありえない」。

贖罪にせよ、鎮魂そのものにせよ、それ自体は現に裁判闘争をたたかう患者の「ために」とか、水俣を「代弁する」とかいう構えといった、実利をともなう直接的な「支援」の次元とはことなるところに属する。むろん、「運動」としての劇は「基金」によって患者を側面から支援するという部分をもっているわけだが、砂田が思い描く劇そのものは、水俣と出会ってしまった役者＝呪術師がおのれの生き方を文字通り「破碎」し、表現者としての主体そのものを問い直すこと、そのことによって、まず役者自身が「よみがえり」を果たすこと、さらに、演じるものと観客との双方を激しい、あるいは残酷なまでの試練のもとに置きながら、ともに再生することを目指すものであった。表現者がその「題材」を資源としてたんに利用するといった構図といかに決別するか。そして究極的には不可能かもしれないが、贖罪をいかにおのれの身体に受肉させる道を探るのか。

「苦しみの極限をわが身にひきうけた人間が悶絶のきわに投げ返すことばは、渾身の行為そのものとなって舞台上に存在することができるのではないか。そしてその場合、役者はそれをたんに演じているという事実によって、観客はそれをたんに観ているという事実によって双方ともに引き裂かれ問いつめられるのではないか。—ここに、私のいう劇による告発の真意があります。」

患者を「表現」するのではなく、死者の「ことば」を宿す器になること。役者が台本を表現するのではなく、「ことば」が役者の身体を借りて存在すること。だから、役者は霊媒となり巫女となるのでなければならない。「表現」が不可能であるならば、理屈としてもそうならざるをえない。けれども、実際にそれを舞台で実現することはそう簡単なことではない。もちろん、演技や演出の問題もある。上演形態のこともあるだろう。だがそれ以上に、死者の「ことば」の器になる、という変性を語る場合に、演劇は舞台の上での仮構にとどまることはできず、役者の人生そのものの変性を要求せざるをえないのではないか。「よみがえり」は、役者の人生そのものとして生きられなければならないのではないだろうか。少なくとも、砂田にとってはそうだったと、私は思う。その第一歩として「巡礼」の構想があったのだろうし、あるいは実際に試練として生きられた「劇・苦界浄土」があったはずである。そしてその延長線上には水俣への移住が控えていた。

〈祖さまの郷土〉「私は一年越しの懸案であった水俣移住を近く実現することになりました」——一九七一年十一月、砂田は関係者に水俣移住にあたっての挨拶を書き送っている（『祖さまの郷土』に収録）。

「水俣病患者への加害人間から脱け出すための積極的な、創意工夫にみちた生き方」を求めて、「定職をもたない反消費反文明の日常生活」をきりひらく、そして、「万斛の涙を呑んだ苦海浄土から再生する民衆演劇の可能性」を探る。患者の「手」となって「随時患者各家庭に出没する」。これだけ引用すると、なにか悲壮な決意とともに東京を捨てたように見えてしまうけれども、挨拶文全体には一種の突き抜けた明るさというか、わくわくするような予感のようなものが漲っている。いかにもロマンチックな、とも見えそうだが、砂田は最初の水俣巡礼のときから、そこに「故郷」を直感し、「水俣に住みたい」という思いを募らせていったのである。「私なる者は、単に血の気のうすい都会人であるばかりではなくて、行方定めぬ流亡農民の子であり、そのような素性の者としての万恨とロマンが血のさわぐような直覚となって、ひたすらに患者たちの傍らに私を走らせたのではありませんまいか」—挨拶にはそうも書かれていた。

さまざまな展望を抱きながら砂田が水俣病多発地帯の湯堂に、妻と母とともに移住したのは、明るく一九七二年の一月二十二日。劇団「不知火座」の看板を掲げ、農業に親しみ、手書きのイラストの入った個人紙『不知火の海から』を発行し、そして地元の人たちと濃密に交流する日々が始まる。その間の事情はこの『不知火の海から』が再録されている砂田の著書『祖さまの郷土 水俣から』にく

わしい。そこには水俣漁村部の風土や生き物たち、百姓修行の日々、谷中村滅亡史をはじめとする棄民史への思い、湯堂の人達との宴の席での交流、水俣病の惨禍とそれを生み出した経済優先の戦後社会への激しい憤り、老母の急逝、農と地域主義と「経済の縮小」を中心とする「明日の豊かさ」への提案、等々、砂田の日常とその思索がみずみずしく綴られている。

その後、一九七九年に、砂田は患者田上義春氏とともに自給農園を開くべく鹿児島県との県境に近い水俣市袋神川に移住、此処を終の棲家に定めると共に、「生類合祀の乙女塚」の設営を掲げてあらたな勸進興行を開始する。「乙女塚」というのは、胎児性水俣病を病んだ乙女たちに因んでの命名だ。「劇・苦海浄土」でとりあげなかった「天の魚」を演劇化した一人舞台は、八〇年一月の水俣市湯堂、出月の公演を皮切りに二年半で一八〇回の公演を重ね、さらに一九九二年までの舞台を合わせるとじつに五五六回を数えることとなる。東京から水俣へ旅立った役者が、こんどは水俣から全国に向かう旅の途についたのだった。

〈塚守〉「乙女塚農園」に砂田明を訪ねたのは一九八一年八月の終わり頃のことだ。この年の五月には「乙女塚」がおおよそ完成して、すでに落慶供養がおこなわれていた。私は旧暦八月一日（八月二九日）を期して予定されている「第一回塚まつり」にあわせて（手伝いも兼ねて）水俣の地を初めて踏んだのである。

国道からはずれて緩やかな坂道を登ると、竹林のあいだに木造の母屋―「塚守の家」―が見えてくる。そのうらに立つプレハブ二階建て―「みんなの家」―が私たちの宿である。さらにその先の小高い丘をゆるゆる登ると、小さな石室がつくられているのが見える。乙女塚だ。塚の前まで来て後ろを振り返ると、かなたに不知火海が横たわっている。この塚の前で、まつりはおこなわれ、「天の魚」の舞台が奉納され、そして各地から訪れた人たちが集って宴が催される…

鎮魂と贖罪のモニュメント―乙女塚のことを思うと、ふとそんな言葉が浮かんでくる。鎮魂と贖罪の行を深めるために、表現されざるもの、贖いきれないものを「祀る」ために旅立った役者は、乙女塚という舞台装置を得て、「塚守」という役をみずからにあたえたのだろうか。舞台の上での「よみがえり」の儀は、乙女塚というあらたな舞台装置を得て、ついに役者の生活へと、夢とうつつの境から溢れ出したのだろうか。そして、「祀り」は「祭り」となることによって、あらたな「よみがえり」の共同性を呼びもとめていたのであろうか。それを人はロマンティズムと呼び、ユートピアと呼ぶのだろうか。

仮にそうであるとして、私はこのロマンティズム―過酷な巡業に支えられたロマンティズム―を、誰も決して否定し去ることはできないと思う。もしかすると砂田明は、いまま終わることのない水俣の厳しい現実の周縁部にいることが多かったのかもしれないが（だが、患者以外の誰が周縁部以外にいられるのか）、演技という仮面と生活する個とをまるごと賭けた彼の有様こそが、ほかならぬ水俣の死者のこぼれによって数知れぬ観客を撃ち、それぞれの命の革り（あらたまり）に向けて突き動かし、多くの人々のつながりを作り上げたのだから。

私たちはふたたび、ユートピアに思いを潜めなければならない。

〈終わりに〉二十数年前に砂田明の世界にかかわり、いまは水俣から遠く離れたところで日々を送っている者が、砂田明について拙い文章を書く仕儀になった。学生時代に砂田明の巡業に何回か同行したにもかかわらず、旅の日常―公演先（勸進元）の人たちと共同で手作りの舞台を造っては壊し、つぎの公演先に向かう日々―や、「天の魚」の舞台そのものについて記す余裕はもうなさそうだ。旅先での出会い―沖縄、北海道、東北、フィリピン…―、また、一人芝居の傍らで新たに構想された劇―原民喜の作品をもとにした『鎮魂歌』など―についてもここでは触れられそうもない。

演劇版「天の魚」については本書にその台本が収録されているのでそちらをご覧になってほしい。この秋、川島宏知によって再演されるものである（本書が出るころにはすでに公演が行なわれているはず）。

”さようなら約束の土地  
涙ん出〔づ〕るふるさと  
水俣大好き”

最後の言葉を書きつけて砂田明が亡くなったのは、一九九三年七月のことだった。

#### 参考図書

砂田明『祖さまの郷土 水俣から』、講談社、1975.

—『海よ母よ子どもらよ 夢勸進の世界』、樹心社、1983.

石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』、講談社、1969.

—『流民の都』、大和書房、1973.

岩瀬政夫『水俣巡礼—青春グラフィティ’70～’73』、現代書館、1999.



# メディア掲載

朝日新聞西部夕刊2006年9月12日

「天の魚」復活公演 主演・演出川島さん、水俣病描いた一人芝居 14年ぶり【西部】

全国を行脚しながら水俣病の悲惨さを告発した故砂田明さんの一人芝居「天（てん）の魚（いを）」を復活させる企画が東京で進んでいる。かつて公演を支えた人だけでなく、原作となった作家石牟礼道子さんの作品を通して、ウェブサイト上で知り合った若者もボランティアとして加わる。水俣病公式確認から50年の今年、ふたたび命の尊厳を問う舞台の幕が上がる。（金順姫）

80年の「天の魚」東京公演で受け皿になった団体「東京不知火座」が6月に再発足し、企画を担う。砂田さんの舞台や患者支援の様子をカメラに収めた写真家の宮本成美さん（58）らが中心だ。「当時を知る人間も年齢を重ね、この機を逃すと復活は難しくなると思った」と宮本さんは語る。

演じるのは、弟子で俳優の川島宏知さん（60）。和光大学（東京都町田市）で15日から始まる「水俣展」で初演し、来年の本公演に向けて練り上げていく。砂田さんの脚本を使い、主演の川島さんが演出もする。

川島さんは演劇学校で砂田さんの教えを受けた。「天の魚」には舞台監督としてかわり、演技を間近で見た。

「復活公演をやるのは川島さんしかいない」。そんな周りの声に迷い続けた。患者に寄り添おうと移り住んだ水俣を拠点に発信を続けた師。東京にとどまる自分に演じる資格はあるのか――

台本や「苦海浄土」を読み返した。生命の尊さを実感できる内容に、改めて感動を覚えた。「逃げたばかりはいられない」。公式確認から50年の年に演じるのも意義があると考えた。

砂田さんの「天の魚」を直接には知らない世代も引き寄せられてきた。石牟礼文学を語り合うためインターネット上に集う仲間のうち、30代の2人が照明や音響を手伝う。東京都の会社員、松元誠さん（31）は8月に熊本を訪れ、石牟礼さんや水俣病の患者に会った。「患者支援の運動にすぐに飛び込むのは難しい。水俣病のことを多くの人に知ってもらおう手助けができれば」とボランティア参加を決めた。

いまま水俣に住む砂田さんの妻エミ子さん（79）は「川島さんなりの天の魚ができあがるでしょう。いい作品ができてくれればいい」と話している。

和光大の公演は15～17日、22日、23日の5日間。問い合わせは佐藤さん（090・8085・5367）へ。

## ◇キーワード

<天の魚> 石牟礼道子さんの作品「苦海浄土」の中の一章「天の魚」をもとに、93年に亡くなった舞台俳優の砂田明さんが脚色・構成した一人芝居。仮面をつけて水俣病を患った老漁師に扮する俳優の語りから、病の悲惨さと自然の尊さが浮かび上がる。79年に初演、砂田さんが病に倒れる92年までの公演は556回を数えた。砂田さんは「苦海浄土」に心を動かされて東京・水俣病を告発する会の世話人となり、72年に妻エミ子さんと熊本県水俣市に移住して活動を続けた。

## 【写真説明】

水俣病告発・故砂田明さん一人芝居

「天の魚」復活脈々と

弟子公演支える若者

町田・和光大学

全国を行脚しながら水俣病の悲惨さを告発した故砂田明さんの一人芝居「天の魚」が復活した。砂田さんの弟子の俳優が15日、町田市の和光大学で演じた。かつて公演を支えた人たちがだけでなく、原作を書いた作家石牟礼道子さんの作品を通して、ウェブサイトで知り合った若者もボランティアとして加わる。来年の本公演に向けてさらに練り上げていく。

80年の「天の魚」東京公演で受け皿になった団体「東京不知火座」が6月に再発足し、企画を担う。砂田さんの舞台や患者支援の様子をカメラに収めた写真家の高本成美さん(58)らが中心となった。演じるのは、弟子で俳優の川島宏知さん(60)。

演劇学校で砂田さんの教えを受けた。「天の魚」には舞台監督としてかわった。川島さん(60)は「復活公演をやるのは川島さんしかない」。周りに声を迷い続けた。患者に寄り添おうと移住した水俣を拠点に発信を続けた町田。東京にどまる自分に演じる資格はあるのか。

日本や原作の「苦海浄土」を眺み返した。生命の輝きを表現できる内容に、改めて感動を覚えた。「逃げてばかりはい

られない」。水俣病の公式確認から50年になる今年演じるのも、意義があると考えた。砂田さんの「天の魚」を直接には知らない世代も引き寄せられてきた。石牟礼文学を語り合うためインターネット上に集う仲間うち、30代の2人が照明や音響を手伝う。

杉並区の会社員松元誠さん(31)は「患者支援の運動にすぐに飛び込むのは難しい。水俣病のこと



「苦海浄土」の世界を演じる川島宏知さん＝町田市の和光大で

天の魚 石牟礼道子さんの作品「苦海浄土」の中の一章「天の魚」をもとに、93年に亡くなった舞台俳優の砂田明さんが脚色・構成した一人芝居。仮面をつけて水俣病を患った老漁師に扮する俳優の語りから、病の悲惨さと自然の尊さが浮かび上がる。79年に初演、92年までの公演は556回を数えた。砂田さんは72年、妻エミ子さんと熊本県水俣市に移住した。

を多くの人に知ってもらおう手助けができれば」とボランティア参加を決めた。和光大の公演は16、17、22、23日にもある。問い合わせは東京不知火座の佐藤健太さん(090・8085・5367)へ。

水俣病公式確認から50年の節目に、この不治の病を生み出した「近代化とは何か」を多様な視点から問い直す水俣・和光大学展が、9月15日から東京・町田の同大学で大学とNPO水俣フォーラムとの共催で始まった。24日までの10日間開催される。今回の目玉は、1992年に砂田明が亡くなって以来公演されていない一人芝居「天の魚」の再演。砂田を師と仰ぐ川島宏知がその復活に挑み、来場者の拍手喝采をあびた。（加藤宣子）

水俣病は1956年5月1日に熊本県水俣市で確認された神経系の全身病で、運動失調や視野狭窄、手足のしびれなどの症状があり、不治の病である。行政によって認められた認定患者は2955名（新潟水俣病690名も含む）で、自覚症状を訴える申請患者数はその10倍近い2万4613名にも及ぶ。

原因は後に株式会社チッソの工場排水に含まれた有機水銀と認められたが、原因確定や公害認定、その補償まで長い年月がかかっている。2004年には最高裁で国や県の責任が確定したが、国は現在にいたってもその責任をとろうとしていない。

水俣展は、水俣病確認から40年をむかえた1996年9月、実行委員会を主体に品川特設テントで「近代とはなにか」をテーマに、写真パネル、年表パネル、漁具の実物展示、美術作品、映像と証言などで水俣病の実態を伝えた。その後、水俣フォーラムというNPO組織に改組され、豊橋、つくば、大阪、沖縄、浜松、名古屋、川崎、札幌や水俣など日本全国で地元の実行委員会と共催のかたちで水俣展を開催してきた。

水俣展の大学での開催は今回が初めてで、1977年の不知火海総合学術調査団以来29年間、水俣に関わり続ける和光大学の最首悟とゼミ生や教授らがともに企画・準備を行ってきた。テーマは「知ることから始めよう」。

一人芝居「天の魚」は、石牟礼道子の「苦海浄土ーわが水俣病」を原作に、亡き砂田明が構成した舞台上、1979年の初演以来1992年に亡くなるまで566回を数えた。胎児性患者、李太郎の祖父の一人語りを、そこを訪ねた姉（あね）さんが聴く。一人で食事をとることも出来ない李太郎を、「魂の深か子」と慈しむ祖父の方言による素朴な語りは、貧しく病を負った人間の深い哀しみを浮き彫りにする。

砂田を師とあおぐ川島宏知が志を継ぎ、砂田と共演していた琵琶の田原順子、笛・鉦・ギターの木喜一郎、語りの岩井郁子とともに21世紀によみがえらせた。その初演にあつまった人々の多くは、砂田を思い出しながら舞台を見ていたのではないだろうか。時代背景を知らない若い人には少し難しい舞台ではあるが、石牟礼道子が描く水俣の世界の端緒に触れることが出来ただろう。

最首悟はこの日の講演で、水俣病を「平時の戦争」と位置づけ、研究者であり子どもの父親である自身の歩みと重ねながら、時代を考察した。講演には年齢の高い層から学生までさまざまな世代が集まったが、若い人たちへ伝えたいこと、問いかけたいことを中心に哲学者として自らが考えてきた「命の連続性」や「学問の限界性」について話をした。

今後のホールプログラムは、17日「水俣から考える」ーマイノリティとコミュニティ、18日シンポジウム「『専門家社会』を問う」、19日映画「水俣ー患者さんとその世界」を見る、20日朗読劇「海と空のあいだに」、21日シンポジウム「循環型社会へのまなざしー経験としての水俣から」、22日報道特番「埋もれた報告」を制作者と見る、23日「私と水俣病」ー患者さんのお話から、24日講演とリレートーク「私たちは何処へ行くのか」

初日の15日は、屋外でキャンドルと和太鼓の共演による篝火熾し（かがりびおこし）も行い、参加者とともにその火を楽しんだ。24日まで開催される。最寄り駅は小田急線鶴川駅。大学の無料送迎バスもある。詳細に関しては水俣フォーラム03-3208-3051まで。

## JANJAN NEWS 2006年9月20日

<http://www.news.janjan.jp/culture/0609/0609191415/1.php>

水俣と日本のもやいなおし 一人芝居「天の魚」と水俣・和光大学展

猫が苦しんでいる  
狂ったように踊り、もがいている  
舞台の上で黒子がもがき苦しむ猫を演じている。

これは、水俣・和光大学展でのひとり芝居「天の魚(てんのいを)」(東京不知火座)の光景だ。このひとり芝居「天の魚」は、東京の舞台人から転じて水俣に住んだ故砂田明氏がかつて全国を勧進行脚して行ったものだった。水俣病記憶が風化しつつある世間に対し、砂田氏は「水俣の想い」を伝えることを目指し、己の持てる総ての技をこめてこの芝居を創り上げた。

「『苦海浄土』の一章を演劇化したひとり芝居「天の魚(てんのいを)」を演じながら、十数年にわたって全国を行脚することになるのです。それは、水俣の美しい海と山の光景、しかしまた、水面の下で水銀に冒された光景の悲しみを、病に倒れた人々の深い痛みと刺すような問いかけを、魚たち、動物たち、草木たちの霊を、それに、すべての生命が共生する世界への想いを、身体ひとつに宿しながら、あらゆる人々の魂を揺さぶりつづける舞台であり、闘いの旅でした」(「天の魚」プロジェクト趣意書より)

残念ながら、砂田氏はその全国勧進行脚中の1992年に病を得て1993年にその生涯を閉じた。

今回、水俣病公式確認50周年にあたり、ひとり芝居「天の魚」を支援した演劇人たちが「東京不知火座」を再度立ち上げ、「天の魚」プロジェクトとして、ひとり芝居「天の魚」を、「苦海浄土」巡演にも同行した川島宏知(小松敏宏)氏などが演じることとなった。

「水俣・和光大学展」は和光大学創立40周年記念行事の一環として水俣病公式発表50年にあたり企画され、9月15日から24日にかけて開催される。開催趣意書は、「展示によって、小中高校大学の人権・環境教育に資すると共に、関連企画としては和光大学の間関係・経済経営・表現の3学部の教員を主として、いまだ未解決の「水俣病」の根本的問題の所在およびその解決を学究的にはかるものとする。同時に学生、市民の参加企画を多角的に追求するものとする」と説明している。

メイン展示の「プロローグ」はこう語り始める――

1956年4月、幼い少女を「奇病」が襲った。  
すべてはここにある。  
さかな、ねこ、そして、こどもがチッソ排水に含まれた有機水銀の最初に犠牲になった。  
その有機水銀の体内で吸収したこどもたち。  
できれば、わが子に成り代わりたい親を救って生まれたこどもたち。  
こどもたちが犠牲になった持続不可能な社会の始まり。

さらに進むと、実物展示、ユージン・スミスなど写真家の写真、記録映画のビデオ、丸木位里・俊り「水俣の図」（レプリカ 新作）などのアーティストの作品、そして、終わりには水俣・東京展からつづく「記憶といのり」のコーナーがあった。

1996年の水俣・東京展のために、映画作家の土本典昭夫妻が水俣に滞在し遺族を訪ね遺影を「記憶といのり」という題名で展示した。その後も遺影の収集は続けられ、今回の「水俣・和光大学展」では474枚の写真が展示された。水俣で起こったことは、これらの遺影の中にある。

人と人、人と自然のすべてを壊したチッソによる水俣の環境総破壊・エコサイド。

死の海となった不知火海と人と人の関係が崩壊した水俣のまちを市民と患者たちは葛藤しながら立て直してきた。

「熊本県水俣市ではこれを地域の人と人との絆にみため、水俣病によって傷ついた絆を取り戻すために、水俣病と向き合い、話し合うことで意識改革をはかろうとしており、この動きを『もやいなおし』と呼んでいる。このもやいなおしのため、市民自らが参加する多様なプログラム（市民の集い、市民講座、ワークショップ、『火のまつり』、マリンフェスタ、ツアー、コンサートなど）が企画実施されるなど市民や地域の活性化に役立っており、さらには環境問題への意識啓発にも貢献している」（EICネット[環境用語集「もやいなおし」より）

水俣病が公式確認されてから50年が経った。いまだ未解決である「水俣病」の根本的問題の所在およびその解決を学究的にはかる「水俣・和光大学展」、水俣の「記憶といのり」を受け、故砂田明の遺志を継ぐ東京不知火座の「天の魚プロジェクト」、そして、この「水俣・和光大学展」に集った人々によって、水俣のもやいなおしは日本のもやいなおしへとつながっていく。

東京不知火座の「天の魚」本公演は来年9月に東京都江戸川区で行われるとのこと。

また、これとは別に水俣病公式確認50年事業として『胎児性水俣病・障がい者の想いを伝える創作舞台芸術』という当事者による演劇表現も行われる。

（長岡素彦）

# 一人芝居「天の魚」14年ぶり復活

## 水俣の悲劇 終わらない

毎日 2006.9.21

公演も計画している。川島さんは「水俣病の悲惨さと命の尊厳を、作品を通じて感じ取ってもらいたい」と話す。同展は24日まで、上演は22日（午後4時開演）と23日（同7時）。入場料は大人1200円、高校生以下600円。問い合わせは東京不知火座の佐藤健さん（090・80805・5336）。

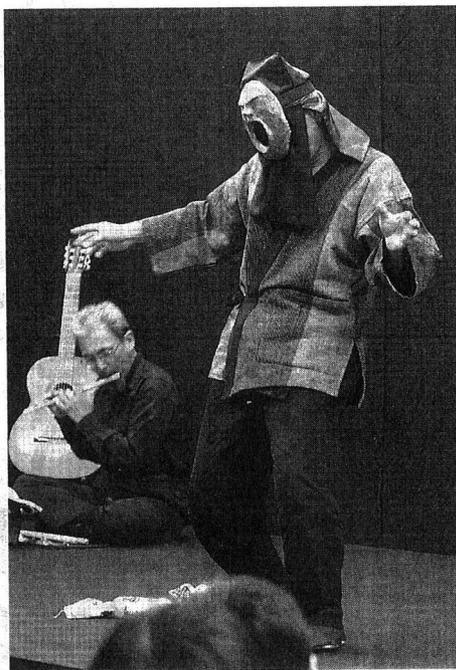
水俣病の悲惨さを命の限り訴えた演劇家、砂田明さんの一人芝居「天の魚」が、故人を慕う俳優らの手で14年ぶりに復活した。砂田さんは79年から92年に肺がんで倒れるまで、患者や家族の悲劇を舞台で伝え、93年に85歳で亡くなった。水俣病の公式発見から50年。「水俣は終わっていない」との思いが込められた舞台は、東京都町田市の和光大で開催中の「水俣・和光大学園」で上演されている。

【古関俊樹、写真も】

### 訴え続け倒れた演劇家

「天の魚」は石牟礼道時の砂田さんの東京公演「子さんの『苦海浄土』」を支えたグループ「東京（89年刊）の」一節をもとに、砂田さんが舞台化した。フリーカメラマンの宮本た。年老いた漁師が、胎成美さん（58）が中心となり、水俣病の孫の将来を案じる気持ちで熊本水俣地方の言葉で語る。92年に肺がんで闘病生活に入るまで、全国で556回上演された。川島さんは今年4月、この話が持ち上がったときから、演劇学校で砂田

## 砂田さんの遺志継ぎ



仮面を付けた漁師を演じる川島さん  
＝東京都町田市の和光大で

さんの教えを受け「天の魚」でも舞台監督を務めた。た。たが、水俣病を深く知るために東京から水俣に移り住んだ砂田さんの情熱を肌で感じ「自分に責めがあるのか」と自問し、の言葉に背中を押され、年秋には東京で本格的な

「毎日新聞」2006年9月21日夕刊「一人芝居「天の魚」14年ぶり復活」

市 川島さんと同じく、水俣病の被害を受けた人々の苦しみを知

送州持明でラ年み

昨年9月に和光大学で上演された「天の魚」(東京不知火座提供)



**水俣病患者の世界**

東京不知火座(江戸川区)の一章をもとに、京が19~22日、同区船堀4のタワーホール船堀で作家、石牟礼道子さんが水俣病患者の世界を描いた作品「苦海浄土」をもとに作られたひとり芝居「天の魚」の公演を開く。

砂田さんは79年に水俣を皮切りに全国各地を巡演。92年まで500回上演され、前売の2500円、当日2800円、全席自由。チケットは事務局で直接購入するか、電話・ファクス(03・3653・1130)かEメール(info@tenno.jp)で申し込む。郵便振替00190-352494(東京不知火座)へチケット代を振り込む。入金確認後に劇団からチケットが送付される。公演4日前からは受付予約だけで、会場での清算となる。【吉永磨美】

TOUR 18日18時半、館林市 シシヤン(おむろ「ガンダール」)

2007.09.06 日刊  
東京不知火座  
**天の魚**  
19~22日 船堀のタワーホールで

週刊金曜日 2006年10月13日

記事を確認作業中

## 終わらぬ「水俣」市民が考える催し

水俣病の公式発見から51年。しかし、いまだ病は続く。「終わっていない」水俣を、自分たちの暮らしと照らしながら考えたいと、19日から4日間、市民による実行委員会が企画する「えどがわ・水俣まつり」が開かれる。作家の石牟礼道子さんの作品「苦海浄土」をベースにした一人芝居「天の魚(いお)」が15年ぶりに舞台化されるほか、水俣からの語り部も参加する。イベントを運営するのは、江戸川区に本拠を置くNGOなどのメンバーが主体。

「天の魚」は、胎児性水俣病の少年を

江戸川で19日から

訪ねた女性に、少年の祖父が孫を時に仏に例え、語っていく舞台。水俣に関心を寄せた演劇人の故・砂田明氏が79年から13年間に556回上演し、81年に紀伊国屋演劇賞特別賞を受賞。今回は、砂田さんの弟子、川島宏知さん(61)が、昨年の町田市での予備公演を経て、本格公演にこぎ着けた。

「水俣まつり」の詳細は<http://edogawaminamata.web.fc2.com/>または「えどがわ・水俣まつり」実行委員会(090・6015・2046)へ。(豊吹雪)

## 終わらぬ苦しみ

# 「水俣」と私 考えよう

水俣病の公式発見から51年。しかし、いまだ病は続く。「終わっていない」水俣を、自分たちの暮らしと照らしながら考えたいと、19日から4日間、市民による実行委員会が企画する「えどがわ・水俣まつり」が開かれる。作家の石牟礼道子さんの作品「苦海浄土」をベースにした一人芝居「天の魚」が15年ぶりに舞台化されるほか、水俣からの語り部も参加する。

(豊吹雪)

06年9月にあった「天の魚」の予備公演  
町田市の和光大学で、宮本成美氏提供

## 江戸川・19日から 芝居「天の魚」や交流会

イベントを運営するのは、江戸川区に本拠を置くNGOなどのメンバーが主体。70年代、水俣支援運動に参加した団塊の世代もいれば、教科書での「水俣」しか知らない30代もいる。

実行委員の一人、江戸川区中央2丁目の小児科医・石橋波子さん(51)は「年齢も経歴も様々だからこそ、それぞれの問題意識も多様で、演劇から、講演、映画上映とイベントの中身も多様になった」という。

「天の魚」は、胎児性水俣病の少年を訪ねた女性に、少年の祖父が孫を時に仏に例え、語っていく舞台。水俣に関心を寄せた演劇人の故・砂田明氏が79年から13年間に556回上演し、81年に紀伊国屋演劇賞特別賞を受賞。今回は、砂田さんの弟子、川島宏知さん(61)が、昨年の町田市での予備公演を経て、本格公演にこぎ着けた。

また、19日午後7時から、今年ようやく水俣病認定を受けた緒方正実さん(49)が語る。聞き手は、水俣問題に長年取り組む最首席・和光大名善教授。20日には、水俣の甘藷生産者グループとの交流会、21日には映画「六ヶ所村ラブソング」の上映会がある。9日には「水俣まつり」の予備公演として水俣のドキュメンタリー映画「海とお月さまたち」(土本典昭監督)の上映、監督講演もある。

「水俣まつり」の詳細は<http://edogawaminamata.web.fc2.com/>または「えどがわ・水俣まつり」実行委員会(090・6015・2046)へ。

# 水俣問題 見つめ直して

ら教えを受け、砂田さん  
の公演を長年支えてきた  
宮本成美さん(左)は「水  
俣の問題はけにとどまら  
ず、人間関係がキスミス  
三時からの公演もある。  
前売り二千五百円、当日  
二千八百円。このほか、  
胎児性水俣病の存在を明  
らかにした原田正純さん  
ら水俣病研究者や、患者  
など不十分な中、仮  
てほしい」と話す。  
うについて考えさせてく  
れる作品。多くの人に  
京都市)で、舞台装  
昨年九月、和光大(東  
京都町田市)で、挑  
川島さんが、挑戦す  
の公演を長年支えてきた

水俣病患者の世界を描いた作家・石牟礼道子さんの「苦海浄土」を舞台化した一人芝居「天の魚(いさ)」が今月十九日から、東京都江戸川区で十四年ぶりに復活公演される。一九八〇年代を中心に、全国で上演してきた砂田明さんが九三年に亡くなって以後、上演される機会がなかった。同区の有志が今年初めて聞く「えとがわ・水俣まつり」で、砂田さんの弟子である川島宏知(こうち)さんが演じる。(小林由比)

情などを語る。



故砂田明さん

「天の魚」は、「苦海浄土」の中の一章を舞台化した。胎児性水俣病の孫を六回にわたり「天の魚」持つ老いた漁師が、美しい水俣の海や、孫への愛、砂田さんの死後、上演

## 「苦海浄土」舞台化「天の魚」 14年ぶり公演



水俣病を題材にした「天の魚」の一人芝居を演ずる砂田明さん＝東京・浅草の木場亭で



「自分たちの地域でも水俣病を考えていきたい」と話す宮本さん(左)＝東京都江戸川区で

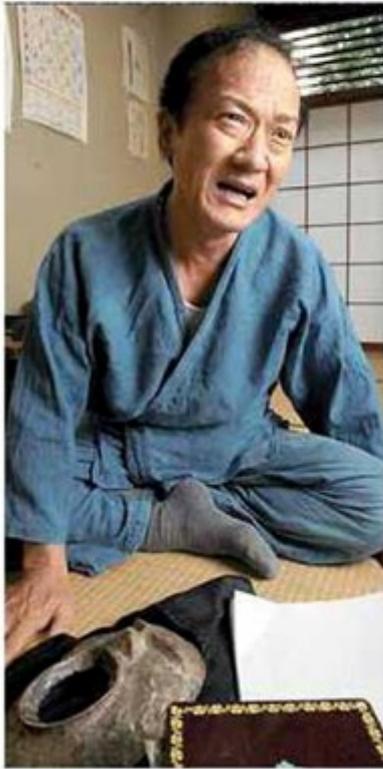
江戸川で 一人芝居56回 砂田さんの遺志継ぐ

1130へ。

# ひと

水俣を描く一人芝居「天の魚」を復活上演する

かわしま ころち  
**川島 宏知** さん(61)



叫んでいるように口がぼっかりあいた面をつけ、一人舞台上立つ。「あねさん、魚は天のくれらすもん(贈り物)でござす」。老いた漁師に扮し、胎内で水銀被害を受けた胎児性水俣病の孫や家族のことを、慈愛に満ちた水俣弁で語る。

水俣を描いた作家石牟礼道子さんの「苦海浄土」を元に、俳優の砂田明さんが脚色し、全国で558回上演した「天の魚」。公害病の実態を告発し続けてきたが、93年に砂田さんが亡くなり、舞台から消えた。

水俣病公式発見から50年の昨年、昔の仲間から「天の魚」の再演を勧められた。母の亡くなった年になり、「役者人生を見つめ直したい」と考えていた。迷った末、引き受けた。ただ一つ残る砂田

さんの面を借り受けた。

今でも心に突き刺さる言葉がある。初舞台を踏んだ71年の「劇・苦海浄土」。最終公演地は水俣だった。住民の抗議に「黙れ」と厚生官僚のせりふを発した時、観客の胎児性患者の少年に怒鳴られた。「なんは言うか」

今回、けいこをしてきて気づいた。「水俣の日々の生活は絶望感に覆われた暗い時間だけではないはずだ」と。苦しみと同時に、作物の売りや豊漁に感謝し、子どもの成長を喜ぶ。そうした個々の人生を丁寧に追って初めて、水俣問題は見えてくる。

公演は東京・船場から19日から。

文 豊 吹雪  
写真 鎌田 正平

ミナマタ描いた一人芝居が復活

## 形見の「面」で遺志継ぐ

石牟礼道子原作の舞台「天の魚」が15年ぶりに再演された。命を削って演じ続けた師の遺志を、直弟子が受け継いだ。背中を押したのは、ミナマタを風化させまいという一念だった。





# いま、ここからのもやい直し

## ひとり芝居『天の魚』復活公演

石牟礼道子が描き出した水俣病患者の世界を脚色し、故・砂田明が全国巡演したひとり芝居『天の魚』。砂田の死とともに途絶えていた（伝説）の舞台が、四年ぶりに復活する。演じるのは弟子の川島宏知。舞台を通して、この国の「もやい直し」の旅が、いま、ここから始まる。

山村清一

あねさん。

魚は

天のくれらすもんでござす。

天のくれらすもんをただで、

わが要ると思うしことつて

その日を暮らす。

これより以上の栄華の

どけえいけばあるうかい。

（『天の魚』台本より）

※左より、お前こそが一番の仏さまじゃわい（和光寺公演より）。

一瞬の後、ハニワにも似た無表情

な面が、満面の笑顔に変化したよう

に見えた。海に生きる漁師の幸福が、

栄華が舞台一杯に輝いた瞬間だった。

「あねさん」と、語り手の老漁民

（江津野老人）から呼ばれるのは、原

作（『苦海浄土』）では作者・石牟

礼道子その人だが、ひとり芝居『天

の魚』の舞台から呼びかけられるの

は、誰でもない、観客自身だ。いつ

しか舞台と観客の境は消え、そこに

「不知火の海」が広がっている。一期

一会の舞台が生む奇跡。

だが、漁民の「栄華」が語られる

まさにその場で、私たちの胸を激し

い痛みが襲う。気がつく、老人は

腕に孫を抱えている。胎児性水俣病

患者の太太郎少年だ。水俣で起こっ

たことが、舞台の彼方から魂の奥

底を揺さぶるのは、そのときだ。

**故・砂田明から川島宏知へ**

ひとり芝居『天の魚』は、『苦海浄

土』の一章をもとに作られた故・砂

田明のライフワークだった。東京の

舞台人だった砂田は水俣へ居を移し、

一九九三年志半ばで倒れるまでに五

五六回の全国巡演を行なった。「魚は

天のくれらすもんでござす」自然

と交感しながら生きた漁民たち。そ

の豊かで美しい世界の背後で、水銀

に冒された患者の苦しみ、決して

「救済」されないことのない家族の悲

しみが続く。

砂田は、私たちの世界を深く侵食

したこの「水俣という出来事」を、

ひとり芝居によって全国に伝えた。

その遺志を継ぎ、一四年ぶりの復活

をめざすのは俳優・川島宏知。砂田

の舞台を常に陰で支え見守り、最も

近くで演劇の教えを受けた男だ。

砂田の死後、何度か話のあった

『天の魚』の復活を断り続けてきた

川島が、なぜ、今回は決意したのか。

「何もかもに呼ばれた気がした」、そ

う語り始める川島。

「昨年は、水俣病『公式発見』から

五〇年に、おとしは、砂田さんが

亡くなってから一三回忌に当たって

いた。次から次へと、背中を押され

ているように感じた」と。

加えて川島自身の故郷での「事件

」があった。高知県宿毛市出身の川島

は、帰郷した折、故郷を流れる川の

上流にダムができる聞き驚く。川

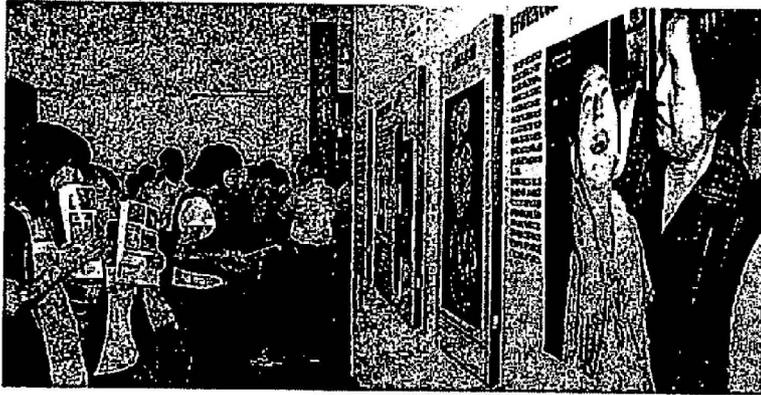
の破壊につながるかもしれないダム

を、地元が嬉々として受け入れるこ

ともショックだった。

「こりゃあ、やっぱりこの国はだめ

# 新潟水俣病 見つめ続ける



新潟水俣病に苦しむすべての被害者を救おうという  
県条例案の策定が進む中、その悲劇と命の尊厳を見つ  
め直す価値が相次いでいる。(伊木緑、奈良部雄)

水俣病をテーマにした一人芝居「天の魚」が来月6、7の両日、県内で上演される。俳優の故砂田明さんが全国を行脚して演じ続けた作品を弟子が復活させた。本格的な公演は昨秋の都内に続き、新潟が2カ所目になる。

## 故砂田明さん弟子 阿賀野と新潟で

「天の魚」は水俣病患者の苦境を描いた作家石牟礼道子

さんの「苦海浄土」をベースにした作品。水俣病に関心を寄せた砂田さんが脚色し、演劇化した。79年からの13年間に全国で558回上演。新潟では81年と90年に上演されたが、93年に砂田さんが亡くなった後は途絶えていた。18年ぶりに演じることになったのは弟子の川島宏知さん(82)。演劇学校で砂田さんの教えを受け、舞臺監督として巡演にも参加した。再演を期待する声に迷い続けたが、昨

年9月、復活に踏み切った。ただ「僕は僕の世界で違ったものを演じた」とし、「告発劇」の印象が強かった砂田さんの芝居とは異なり、生活者としての患者の姿を描いている。舞台に登場するのは、口をぽっかりとあけた面を背けた者漁師だけ。琵琶や笛の音色やナレーションを挟みながら、胎児性水俣病の孫や家族のこと、海への思いを水俣井でぼつりぼつりと語る。今回の新潟公演は、「新潟

水俣病安田患者の全の事務局を担当している旗野秀人さん(58)が都内での初公演を見たのがきっかけで実現。川島さんは「命の尊厳や生きる人の思いが凝縮された作品。初めて原作を読んだ時の感動を忘れずに演じれば、何かは伝わる」と話している。阿賀野市と新潟市の2回。9月6日は阿賀野市保田の市「ミニニティーセンター」城のうらぶで午後2時から、同7日は新潟市中央区市民芸術文化会館りゅうとびあ・能楽堂で午後7時から。無料。問い合わせは旗野さん(090・3649・8845)。

## 一人芝居「天の魚」16年ぶり

水俣病の歴史や被害を写真や資料で伝える「水俣・新潟展」(NPO法人「水俣フォーラム」主催)が新潟市美術館(中央区西大畑町)で開かれている。写真。96年の東京開催を皮切りに、これまでに全国18カ所で開催。九州の水俣病がメインだが新潟展では「新潟水俣病の被害も伝えよう」と特別展示コーナーを設けた。

### 新潟の被害も伝える

「水俣・新潟展」にコーナー。2日の開場式では水俣フォーラムの栗原彬理事長が「新潟水俣病の被害を受けた新潟での開催は患者らがとりわけ望んできたことだった」と語った。横田昭・新潟市長はいまだに患者を中傷する手紙が市に届くことを明かした上で「心の壁を突き崩していけるよう一緒に前進していきたい」と述べた。17日には新潟水俣病を描いた映画「阿賀野に生きる」の上原も予定している。24日まで。

## 患者救済条例案 県が意見募集始める

新潟水俣病の患者を救う恒久的な枠組みとして策定作業が進んでいる「新潟水俣病地域福祉推進条例(仮称)」の案案について、県は一般から意見の募集を始めた。案案は、患者を高度経済成長期の犠牲者として捉え、社会全体で支える救済理念を表明。県が財政措置を講じて総合的な施策を展開する「行政の責務」、正しい理解と教訓の伝承に努める「県民の役割」、地域の再生・融和や患者の経済的負担の軽減などにあたる「県の基本施策」を定めている。案案は県のホームページのほか、県庁の県行政情報センターや各地域振興局でも閲覧できる。意見は、氏名や住所、電話番号を明記して県庁(〒950-0800 70 生活衛生課政策・公害保健係)へ郵送か、FAX(025・2284・6757)、電子メール(mg10402500@pref.niigata.lg.jp)で21日まで受け付けている。



# 抄

李よ、おるが家に  
や神さまも仏さまも、  
よその家よりやうんと  
おらすばって、お前  
そがいちばんの仏さま  
じゃわい。じいさまは、胎児性

水俣病のために重い障害を負った李太郎少年をひき抱いて語りかける▼水俣病患者の世界を描く一人芝居「天の魚」の公演が九月六、七日、阿賀野市と新潟市で行われる。江津野老を演じる俳優の川島宏知さん(左)は「じいさまと孫、二人の魂の触れ合いを感じてほしい」と語る▼「天の魚」は水俣市在住の作家石牟礼道子さんの著書「苦海浄土」を基に、演劇家の砂田明さんが舞台化し自ら演じた。全国を行脚し五百五十六回の上演を重ねたが、一九九三年に砂田さんが亡くなって以降、公演は途絶えていた▼砂田さんの弟子である川島さんは仲間の勧めもあり、悩んだ末に芝居の継承を決意した。「昨年のごとく」。「砂田と同じことはできないが、演劇という形で水俣病を伝えることはできるのではないか」▼折しも新潟市美術館で「水俣・新潟展」が二十四日まで開かれている。水俣病がもたらした悲劇や差別のありさまを展示し、行政や企業への責任を問う。砂田さんの「天の魚」もまた、芝居を通じて水俣病を告発する闘いだった▼川島さんは復活公演に当たって、告発劇の色が濃い砂田さんの台本に少し手を入れた。原作にある母と子の物語を生かして、家族のきずなや人々の暮らしぶりに光を当てたのだ。川島さんの思いは、新潟水俣病の被害者のありふれた日常を描いた映画「阿賀に生きる」に重なるように見える。

2008.8.21

## 新潟日報

平成20年9月7日 新潟日報

県内で18年ぶり

### 水俣病 一人芝居 被害者ら見入る

阿賀野



「苦海浄土」の一編を演劇家の砂田明さんが作品化したもの。砂田さんが一九九三年に亡くなり途絶えていたが、砂田さんの弟子に当たる俳優の川島宏知さんが昨年、東京で復活公演を行った。

水俣病の孫と暮らす漁師の姿を描いた「ひとりの芝居・天の魚」が六日、阿賀野市保田で開かれた。写真＝新潟水俣病の患者や地元住民ら約八十人が、県内では十八年ぶりとなる公演に真剣な表情で見入った。新潟水俣病安田患者の会などの主催。「天の魚」は石牟礼道子さんの著書

川島さんは口を大きく開けた仮面を着けて舞台に登場。焼酎を飲みながら、胎児性水俣病で九歳になる孫に話し掛け、若いころの漁の思い出を熊本弁でとつとつと語る一人の老人を熱演した。水俣病被害者で砂田さんの県内公演も見たという同市の渡辺参治さん(左)は「少し遠く部分もあるが、砂田さんのものとほとんど変わらない。水俣病は二度と起こってほしくない。大勢の人にこの劇を見てもらいたい」と話していた。

七日午後七時から、新潟市民芸術文化会館で公演。入場無料。問い合わせは県立環境と人間のふれあい館、025(387)1450。

## 記事を確認作業中

朝日新聞朝刊 2008年11月12日

へじゃがフェス2008  
29日午前10時〜午後8時と30  
日午前10時〜午後2時、上越  
市土橋の市民プラザ1階工芸  
室。居場所じゃがいも・じゃ  
がいも親の会主催。作品展示  
・販売、琴体験、抹茶サービ  
スなど。29日午後3時と午後  
6時半の2回、川島宏和さん  
のひとり芝居「天の魚」。無  
料(事前申し込みが必要)。  
南雲さん(0255・5255・